

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 福岡財務支局長

【提出日】 2022年6月29日

【事業年度】 第50期(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

【会社名】 イフジ産業株式会社

【英訳名】 Ifuji Sangyo Co., Ltd.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 藤井宗徳

【本店の所在の場所】 福岡県糟屋郡粕屋町戸原東二丁目1番29号

【電話番号】 092 - 938 - 4561(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役経営企画部長 原 敬

【最寄りの連絡場所】 福岡県糟屋郡粕屋町戸原東二丁目1番29号

【電話番号】 092 - 938 - 4561(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役経営企画部長 原 敬

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)
証券会員制法人福岡証券取引所
(福岡市中央区天神二丁目14番2号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次		第46期	第47期	第48期	第49期	第50期
決算年月		2018年3月	2019年3月	2020年3月	2021年3月	2022年3月
売上高	(百万円)	14,396	13,711	14,312	13,825	17,430
経常利益	(百万円)	710	828	951	1,210	1,357
親会社株主に帰属する 当期純利益	(百万円)	555	552	614	830	996
包括利益	(百万円)	566	541	602	832	988
純資産額	(百万円)	5,294	5,702	6,032	6,723	7,529
総資産額	(百万円)	10,972	10,710	10,448	11,038	11,759
1株当たり純資産額	(円)	635.58	684.63	740.93	822.03	916.86
1株当たり当期純利益	(円)	66.67	66.28	75.20	101.63	121.46
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	(円)					
自己資本比率	(%)	48.2	53.2	57.7	60.9	64.0
自己資本利益率	(%)	10.9	10.0	10.5	13.0	14.0
株価収益率	(倍)	11.7	10.6	10.5	9.2	8.1
営業活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	1,203	761	1,165	1,053	1,140
投資活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	488	239	296	239	311
財務活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	625	447	708	311	596
現金及び現金同等物の 期末残高	(百万円)	1,690	1,766	1,927	2,429	2,661
従業員数 [外、平均臨時雇用者数]	(名)	128 [350]	138 [361]	149 [356]	145 [338]	138 [324]

- (注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2 従業員数欄の[]内は、外数で臨時従業員数(年間の平均雇用人数)であります。
3 臨時従業員には、定年後の再雇用者、パートタイム従業員及びアルバイトを含み、派遣社員を除いておりません。
4 第50期より、定年後の再雇用者は、従業員数から除き臨時従業員数に含めております。なお、第49期以前につきましても従業員数を組替修正した人数に基づき算定しております。
5 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第50期の期首から適用しており、第50期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第46期	第47期	第48期	第49期	第50期
決算年月	2018年3月	2019年3月	2020年3月	2021年3月	2022年3月
売上高 (百万円)	13,268	12,527	13,201	12,720	16,343
経常利益 (百万円)	691	804	958	1,197	1,311
当期純利益 (百万円)	543	538	631	806	966
資本金 (百万円)	455	455	455	455	455
発行済株式総数 (株)	8,345,370	8,345,370	8,345,370	8,345,370	8,345,370
純資産額 (百万円)	4,807	5,202	5,548	6,216	6,992
総資産額 (百万円)	10,217	9,965	9,700	10,280	10,948
1株当たり純資産額 (円)	577.19	624.57	681.56	760.06	851.54
1株当たり配当額 (1株当たり中間配当額) (円)	16.00 (8.00)	17.00 (8.00)	20.00 (9.00)	24.00 (10.00)	28.00 (12.00)
1株当たり当期純利益 (円)	65.27	64.62	77.27	98.76	117.85
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)					
自己資本比率 (%)	47.1	52.2	57.2	60.5	63.9
自己資本利益率 (%)	11.8	10.8	11.7	13.7	14.6
株価収益率 (倍)	11.9	10.9	10.2	9.5	8.4
配当性向 (%)	24.5	26.3	25.8	24.3	23.8
従業員数 [外、平均臨時雇用者数] (名)	95 [324]	104 [335]	113 [335]	112 [319]	110 [304]
株主総利回り (比較指標：配当込み TOPIX) (%)	89.2 (115.9)	82.5 (110.0)	94.4 (99.6)	113.9 (141.5)	122.3 (144.3)
最高株価 (円)	975	830	875	1,010	1,067
最低株価 (円)	696	607	630	702	890

- (注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2 従業員数欄の[]内は、外数で臨時従業員数(年間の平均雇用人数)であります。
3 臨時従業員には、定年後の再雇用者、パートタイム従業員及びアルバイトを含み、派遣社員を除いております。
4 第50期より、定年後の再雇用者は、従業員数から除き臨時従業員数に含めております。なお、第49期以前につきましても従業員数を組替修正した人数に基づき算定しております。
5 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第50期の期首から適用しており、第50期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を適用した後の指標等となっております。

2 【沿革】

- 1972年10月 資本金3,000千円で福岡市中央区桜坂にイフジ産業株式会社を設立。
- 1973年 9月 福岡県糟屋郡粕屋町(現本店所在地)に本社工場完成、液卵の製造販売を開始。
- 1974年 8月 千葉県市川市に関東営業所設置。
- 1975年 4月 大阪市西区に大阪営業所設置。
- 1977年 3月 福岡県鶏卵加工協同組合を設立。
- 1978年10月 農水省の鶏卵加工合理化センター設置事業に基づき、福岡県鶏卵加工協同組合が国庫補助を受け、割卵機及び殺菌設備を導入、福岡県鶏卵加工協同組合に生産を委託(本社工場を貸与)、当社は販売会社となる。
- 1981年 3月 本社工場隣接地を買収。工場を増設し福岡県鶏卵加工協同組合に貸与。
- 1981年12月 茨城県水戸市に日配水戸販売株式会社と合併で株式会社関東イフジ(資本金10,000千円)を設立。(1986年 3月に100%子会社とする。)
- 1982年 5月 株式会社関東イフジ水戸工場が完成し、関東地区での生液卵の製造販売を開始。関東営業所を水戸市に移転。
- 1983年 4月 福岡県嘉穂郡穂波町の有限会社日の丸食品を買収、株式会社に組織変更。
- 1987年10月 日の丸食品株式会社の社名を株式会社イフジフーズに変更。
- 1988年 3月 首都圏での販売量の拡大に伴い株式会社関東イフジ水戸工場の隣接地を買収し工場を増設。
- 1988年 4月 株式会社イフジフーズにてゆで卵の製造販売を開始。
- 1989年 5月 奈良県奈良市に株式会社関西イフジを設立、近畿圏での生液卵の製造販売を開始。大阪営業所を奈良市に移転し関西営業所と改称。
- 1990年 3月 三重県上野市の有限会社カネヒロ食品を買収、株式会社に組織変更。
- 1996年 4月 製販一体化のため、株式会社関東イフジ、株式会社関西イフジ、株式会社カネヒロ食品、株式会社イフジフーズを合併するとともに福岡県鶏卵加工協同組合の所有資産を買取る。(福岡県鶏卵加工協同組合は解散。)
- 組織編成を関東事業部、関西事業部、三重事業部、福岡事業部の各地区事業部制とする。
- 1996年 7月 本店所在地を福岡市中央区桜坂から福岡県糟屋郡粕屋町(現本社住所)に移転。
- 1996年10月 愛知県安城市に名古屋事業部を設置、中京圏での生液卵の製造販売を開始。
- 1998年 8月 三重事業部を閉鎖。
- 1999年11月 関東事業部近接地に新工場用地を取得。
- 2001年 5月 関東事業部新工場完成。
- 2001年 8月 日本証券業協会に店頭登録。(株式会社大阪証券取引所 J A S D A Qスタンダード市場に上場。)
- 2002年 4月 有限会社春日ビルを買収。
- 2003年 5月 有限会社春日ビルを株式会社春日ビルに組織変更。
- 2004年 3月 京都府綴喜郡井手町に関西事業部新工場完成。
- 2009年11月 日本化工食品株式会社(本社：東京都千代田区)の発行済株式の100%を取得し、連結子会社化。
- 2011年 8月 証券会員制法人福岡証券取引所に株式上場。
- 2012年 5月 株式会社東京証券取引所市場第二部に株式上場。
- 2012年 8月 株式会社大阪証券取引所 J A S D A Qスタンダード市場上場廃止。
- 2013年 2月 太陽光発電事業を開始。
- 2014年12月 株式会社春日ビル(連結子会社)の全株式を譲渡。
- 2015年10月 日本化工食品株式会社の子会社として一房総味株式会社(非連結子会社)を設立。
- 2017年 3月 株式会社東京証券取引所市場第一部銘柄に指定。
- 2018年 5月 関東事業部にて国際認証の食品安全マネジメントシステム「FSSC 22000」の認証を取得。
- 2019年 2月 連結子会社である日本化工食品株式会社の本店所在地を福岡県糟屋郡粕屋町に移転。(実際の本社機能所在地も東京都中央区に移転。)
- 2019年 3月 日本化工食品株式会社にて国際認証の食品安全マネジメントシステム「FSSC 22000」及び「ISO 22000」の認証を取得。
- 2019年 3月 一房総味株式会社(非連結子会社)を日本化工食品株式会社に吸収合併。
- 2020年 3月 エッグホワイトプロテイン「REVOPRO」を発売。
- 2021年 7月 関西事業部にて国際認証の食品安全マネジメントシステム「FSSC 22000」の認証を取得。

(注) 2022年 4月 4日に東京証券取引所の市場区分見直しにより市場第一部からスタンダード市場に移行しております。

3 【事業の内容】

当社グループの企業集団は、当社及び連結子会社1社の2社から構成されており、「鶏卵関連事業」と「調味料関連事業」の2つの事業を中核としております。また、「その他」として太陽光発電事業を行っております。

当社及び当社の関係会社の事業における当社及び関係会社の位置付け及びセグメントとの関連は、次のとおりであります。なお、セグメントと同一の区分であります。

鶏卵関連事業

当事業においては、省力化、品質の安定化、輸送効率の点から、鶏卵を割卵して卵殻を取り除き、製パン業者や製菓業者、惣菜業者等からの受注に応じて、全卵、卵黄、卵白を生液卵、凍結卵の形で製造販売しております。

(主な関係会社) 当社

調味料関連事業

当事業においては、業務用粉体調味料及び顆粒調味料等を製造販売しております。主な販売先はインスタント食品業界であり、開発力や商品力を認められ、主に大手食品メーカーに納入しております。

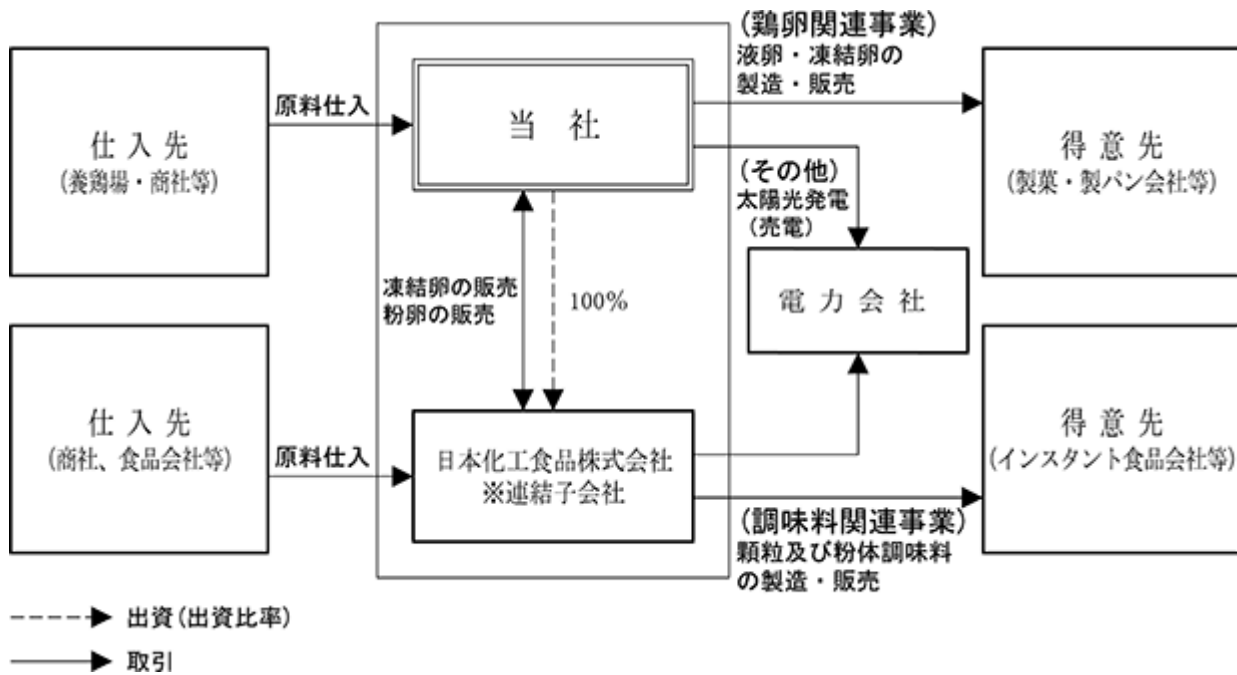
(主な関係会社) 日本化工食品株式会社

その他

太陽光発電事業を営んでおります。

(主な関係会社) 当社、日本化工食品株式会社

事業の系統図は次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) 日本化工食品 株式会社 (注) 1	福岡県糟屋郡 粕屋町 (注) 2	95	業務用粉体調味料 及び顆粒調味料等の 製造販売	100.0	役員の兼任あり 事務業務の受託

(注) 1 特定子会社であります。

2 登記上の本店所在地によっております。なお、実際の本社機能所在地は東京都中央区であります。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2022年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(名)
鶏卵関連事業	110 [304]
調味料関連事業	28 [20]
合計	138 [324]

(注) 1 従業員数は就業人員数であり、臨時従業員数は[]内に年間の平均人員を外数で記載しております。

2 臨時従業員には、定年後の再雇用者、パートタイム従業員及びアルバイトを含み、派遣社員を除いております。

3 当連結会計年度より、定年後の再雇用者は、従業員数から除き臨時従業員数に含めております。

(2) 提出会社の状況

2022年3月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
110[304]	39.5	13.3	5,087

セグメントの名称	従業員数(名)
鶏卵関連事業	110 [304]
合計	110 [304]

(注) 1 従業員数は就業人員数であり、臨時従業員数は[]内に年間の平均人員を外数で記載しております。

2 臨時従業員には、定年後の再雇用者、パートタイム従業員及びアルバイトを含み、派遣社員を除いております。

3 当事業年度より、定年後の再雇用者は、従業員数から除き臨時従業員数に含めております。

4 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

労働組合はありませんが、労使関係は円滑な関係にあり、特筆すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものであります。

(1) 経営方針

当社は、「わが社は、高い倫理観を保ち、浮利を追わず、質実剛健と先憂後楽の社風を確立して、社業の発展に努め、以って取引先、従業員並びに株主に対する企業責任を全うし、社会に貢献することを旨とする。」という基本理念に基づき、販売先である食品業界へは徹底した品質管理のもと安定した製品を安定的に供給し、仕入先である鶏卵業界へは需要期、不要期のアンバランスをなくす需給調整機能を提供し、また食のインフラとして国民の豊かな食生活に貢献してまいります。また、社会の公器として法令はもとより企業倫理を遵守します。

また連結子会社の日本化工食品株式会社は、「1.この仕事を通じて社会に貢献する。2.この仕事を通じて魅力ある立派な人間を育成する。3.取引先より信用と信頼を得られる魅力ある商品を創造する。4.魅力ある会社、魅力ある工場にしてゆく。」という会社理念を基本としております。

(2) 経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社グループは、経営上の目標達成状況を判断するための客観的な指標等につきましては特に定めておりませんが、売上高経常利益率8%以上を安定的に確保することを目標としており、この数値を会社の持続的な成長のための製造設備や研究開発等への積極的な投資の源泉、株主に対する利益還元の源泉、また従業員の持続的な所得向上等の従業員満足度向上のための源泉と位置づけ、この指標を達成できるよう努力してまいります。

(3) 経営環境、経営戦略及び対処すべき課題

当社グループが属する食品業界におきましては、原材料価格の高騰や円安を背景とする食品価格の値上げによる消費者の生活防衛意識の強まりや、国内の人口減少に伴う国内需要の減少懸念など、厳しい経営環境が続くことが予想されます。加えて、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大に伴い、食に対する需要が大きく変化しております。

このような状況を踏まえ、当社グループは、中長期的な会社の経営戦略と対処すべき課題について、以下の諸施策を推進し、企業価値の増大に努めてまいります。

営業施策

鶏卵関連事業に関しましては、主要な製品である液卵、凍結卵について、お客様が求める品質の製品を、安定供給することを使命とし、適正価格でご提供できるよう、営業コスト削減や業務の合理化等に努めてまいります。また営業と研究開発との連携を強化させることにより、お客様ごとに適した製品を提供してまいります。少子高齢化や人口減に伴う労働力不足が社会問題化する中、液卵、凍結卵は業務の効率化、省力化にアドバンテージを持つ製品であることをアピールし、新たなお客様や新たな業種への積極的な拡販を行ってまいります。

調味料関連事業に関しましては、主要な製品である粉体及び顆粒調味料の販売に関するマーケティングを強化し、営業と研究開発の相互連携によってお客様のニーズを迅速に製品開発に反映させて高付加価値化を図り、販売価格の適正化に努めるとともに、独自の生産技術を活用し、主力である即席めん・ふりかけ業界以外にスナック菓子業界等新たな業種への提案を強化し、販路拡大に努力してまいります。

購買施策

鶏卵関連事業に関しましては、国内での鳥インフルエンザの発生に伴う鶏卵の需給逼迫懸念や飼料価格の変動及び養鶏業界の寡占化が進むなど、購買環境は大変厳しくなると予想されます。このような状況を踏まえ、仕入先の更なる拡大、需要と供給のアンバランスを調整する需給調整、原料定期仕入比率の向上、委託生産、輸入の検討等、仕入システムの多様化を図り、当社が経営の第一目標としているお客様への安定供給責任を果たしてまいります。

調味料関連事業につきましては、得意先の商品のライフサイクルが短いため、購買管理と在庫管理を徹底し、原料や資材等のデッドストックを減らすべく努力してまいります。

製造施策

鶏卵関連事業に関しましては、食品メーカーとして品質を第一とし、食品安全マネジメントシステムの導入や最新鋭設備の新設及び増設、既存設備の更新等を積極的に行い、お客様へより安全・安心な製品を安定的に提供すべく努力してまいります。また、品質保証体制の継続的な改善を図るため、作業手順書・マニュアルの整備はもちろんのこと、製造会議・安全衛生委員会を充実させ、従業員の衛生意識の向上、食品衛生法関連の法令並びに規制を遵守させるための教育に力を入れてまいります。さらに、社内で推奨している2S（整理、整頓）を徹底し、作業環境の改善等による作業効率化を図ってまいります。

調味料関連事業に関しましては、品質向上・生産効率向上のための設備更新や生産ラインの合理化等を積極的に行い、安全・安心な製品を製造することを第一の目標とし、従業員の意識改革により品質保証体制の構築及び経費削減を進め、またシステム活用及び多能工化による作業の効率化により製造効率の向上に努力してまいります。

コスト削減活動

コスト削減については、従業員がコスト削減や業務改善について提案する「提案制度」を設けており、この制度を積極的に活用し、社内でのコスト削減意識を高め、低コストオペレーション（「品質」・「効率」・「歩留」・「もったいない」）の推進に努めてまいります。また、社内のコスト削減への取り組みに対する評価を行い、優秀な提案を表彰するなど、常に業務改善やコスト削減に取り組む体制にしてまいります。

研究開発

鶏卵関連事業に関しましては、営業との連携を図り、周囲の状況や変化を敏感に捉えるセンスと柔軟な発想をもって利益に貢献できる品質改良や製品開発を行ってまいります。その中でもお客様のニーズが高い商品に的を絞って取り組めます。また、研究機関や大学、他社との連携を図り、卵殻及び卵殻膜の用途開発等、鶏卵の新規用途の可能性や廃棄物の有効利用のための研究開発を強化してまいります。

調味料関連事業に関しましては、開発担当者が営業担当者とチームを作り、お客様の様々な要望に応えるために、直接訪問し対話することで、お客様の意図や嗜好性を把握しながら商品開発を進めてまいります。

業容の拡大

当社グループとシナジー効果の見込める業務提携や買収なども視野に入れ、業容の拡大を図ってまいります。

なお、新型コロナウイルス対応につきましては、感染拡大防止と事業継続維持の両面からリスク管理を徹底しており、製品に係る「食の安全」のための施策はもちろんのこと、お取引先様や従業員の健康と安全の確保に努め、万一の場合にも事業への影響を最小限に抑えられるよう必要な対策を優先的に実行してまいります。同時に、外出自粛等による「巣ごもり」「即食」「留守食」等の需要にも対応してまいります。

2 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が連結会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があると認識している主要なリスクは、以下のとおりであります。

なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 鶏卵相場が業績に与える影響について

当社グループの鶏卵関連事業の主力製品である液卵は、主原料が鶏卵であり、毎日の鶏卵相場に応じて販売価格及び仕入価格が変動します。当社では、相場変動によるリスクを回避できるよう、夏場の低需要期に原料卵を安く仕入れたり、原料コストの低廉化を図るため比較的安価な加工用原料卵の購入比率を高めたりするなどして、仕入価格と販売価格の差益を一定額以上確保するとともに販売数量を伸ばす努力をしております。

しかしながら、国内での食料政策の変更や大規模な鳥インフルエンザの発生等により鶏卵需給が著しく変化し、相場動向に大きな変化が生じた場合、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 食品の安全・衛生問題について

近年、消費者の食の安全・安心に対する意識は一段と高まってきております。当社グループにおきましては、安全・安心で高品質な製品を提供するために最新鋭設備の導入や徹底した製品の品質・温度管理、従業員への衛生教育を行うなど、当社グループ製品の安全・衛生問題には万全の注意を払っております。

しかしながら、今後、偶発的な事由によるものを含めて、万一、当社グループ製品を起因とした安全・衛生問題が発生した場合、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 凍結製品の在庫について

当社グループの鶏卵関連事業におきましては、販売の見通し、鶏卵相場や原料の買付状況、また工場の稼働状況等、さまざまな状況を勘案して長期保存が可能な凍結製品を製造・保管しており、棚卸資産合計額の約6割を占めております。また、その大部分は外部の営業倉庫に保管しており、その在庫管理は主に外部倉庫業者からの入出庫取引報告書や在庫証明書と社内のシステム記録の照合で行っております。凍結製品は、低需要期で鶏卵相場が低く原料卵を安価に仕入れることが可能な夏場に多く製造し、原価低減に努めております。

しかしながら、販売が想定通りに進まず過剰在庫となった場合や、鶏卵相場の動向によって保有している凍結製品の原価が上昇した場合、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に影響を及ぼす可能性があります。また、外部の営業倉庫に保管している凍結製品については、その管理について倉庫業者に委ねているため、凍結製品の在庫が大規模に毀損した場合、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 特定の販売先について

当社グループの鶏卵関連事業については、生液卵及び凍結卵の製造販売を主たる事業としております。主要な販売先は、その使用量の多さから製パン業界であり、当連結会計年度における同業界に対する売上高比率は約4割を占めております。その中でも山崎製パン株式会社に対する売上高は特に多く、売上高に占める比率は約2割（商社等経由での販売も含む）であり、同社の仕入・生産動向が当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に影響を及ぼす可能性があります。

当社グループでは、冷凍食品メーカーや総菜メーカー等の新たな業種や新たなマーケットへ販路を拡大し、特定の業種への依存度を下げるとともに、販売数量を拡大することにより財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況への影響を最小限に抑える努力をしております。

(5) 自然災害等による影響について

近年、世界的な気候変動による台風、水害、大雪等の自然災害や大規模地震等の発生頻度や影響度が高まっております。当社グループの鶏卵関連事業は、関東、東海、近畿、九州に工場が4ヶ所あり、不測の事態に備えて互いに他地域の当社工場から供給する体制を整えております。

しかしながら、万一、大規模地震等の自然災害が当社グループの工場の所在地を含む地域で発生した場合、公共インフラの停止や工場の修復等、その被害状況によっては当社グループの経営成績に影響を及ぼす可能性があります。また、予測不可能な停電や通信トラブルが発生した場合、当社グループの業務が中断することも考えられ、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に影響を及ぼす可能性があります。

(6) 情報セキュリティの信頼性について

当社グループは、事業活動を通して、お客様や取引先の個人情報及び機密情報を入力することがあり、また、営業上・技術上の機密情報を保有しています。当社グループでは、これらの情報についての厳格な管理体制を構築し、情報の取扱い等に関する規程類の整備・充実や従業員等への周知・徹底を図るなど、情報セキュリティを強化しております。

しかしながら、サイバー攻撃、不正アクセス、コンピューターウィルスの侵入等により、万一これら情報が流出した場合や重要データの破壊、改ざん、システム停止等が生じた場合には、当社グループの信用低下や財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に影響を及ぼす可能性があります。

(7) 新型コロナウイルス感染症の影響について

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う経済活動の大幅な減退や外出自粛・店舗休業による個人消費の冷え込み等により、景気は急速に悪化し先行きの予測が大変難しい状況にあります。

このような厳しい環境のもと、当社グループでは新型コロナウイルス感染拡大防止と事業継続の体制維持の観点から、当社グループの経営方針、基本理念に基づき、製品に係る「食の安全」はもちろんのこと、お取引先様や従業員及びその家族の健康・安全確保や事業への影響を最小限に抑えるべく必要な対応を最優先に行っております。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症による消費活動への影響度合いや影響の及ぶ期間を見極めることが大変難しくなっており、新型コロナウイルスの影響が長期化した場合、販売数量や生産体制、物流体制等に影響が生じ、当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に影響を及ぼす可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社及び連結子会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、新型コロナウイルス感染拡大が各種感染防止策の効果やワクチン接種の進展により落ち着き、経済社会活動が徐々に正常化に向かい始めるなかで個人消費に持ち直しの動きが見られた一方、新型コロナウイルスのオミクロン変異株の感染拡大、ウクライナ危機を背景とする原油価格の高騰等から物価上昇圧力が強まり、景気の先行きに不透明感が高まりました。

食品業界におきましては、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のための外出自粛要請や休業要請、営業時間の短縮等により外食等の需要が減少する一方で、中食・内食の需要が増加する等、食に対する需要が大きく変化しました。また、穀物価格の上昇等により原材料価格が上昇し値上げが相次ぎました。鶏卵業界では2020年11月から2021年3月にかけての鳥インフルエンザの大規模な発生により鶏卵の需給が逼迫した余波を受けて、鶏卵相場が極めて高い水準で推移しました。

このような状況の中、当社グループの当連結会計年度の連結売上高につきましては、過去最高となる17,430百万円（前連結会計年度比26.1%増）となりました。

損益につきましては、連結営業利益は8期連続増益となる1,325百万円（同11.9%増）、連結経常利益は8期連続増益となる1,357百万円（同12.2%増）、親会社株主に帰属する当期純利益は3期連続増益となる996百万円（同20.0%増）となり、いずれも過去最高益となりました。

なお、「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。）等の適用により、売上高が105百万円減少しております。

セグメントの業績を示すと、次のとおりであります。

鶏卵関連事業

当セグメントにおきましては、主要な商品である液卵の製品販売単価及び原料仕入単価が鶏卵相場に連動して変動するものが多くあります。鶏卵相場が高く推移した場合は、製品販売単価及び原料仕入単価はともに高く推移する傾向にあります。一方、鶏卵相場が低く推移した場合は、製品販売単価及び原料仕入単価はともに低く推移する傾向にあります。そのため、製品販売単価と原料仕入単価の差益の一定額以上の確保と販売数量の確保により利益が最大なるように努めております。

当セグメントにおける売上の指標となる販売数量につきましては、前連結会計年度に比べ5.4%増となりました。これは主に、前述の鳥インフルエンザの大規模な発生に伴い鶏卵の需給が逼迫し鶏卵市場に原料卵が不足するなか、輸入卵や委託生産等多様な調達手段により原料卵の安定確保に注力し、既存取引先への安定供給に努めたことや、営業面での積極的なアプローチにより新規取引先を獲得できたこと等によるものであります。

売上高につきましては、鶏卵相場（全農東京Mサイズ基準値）が26.6%（45円/kg）高と大幅に上昇したことに伴い連動する販売単価が上昇したこと及び販売数量が増加したこと等により、液卵売上高は15,219百万円（前連結会計年度比29.6%増）となりました。また、加工品売上高は卵白プロテインの販売増等により509百万円（同8.6%増）、その他売上高は591百万円（同23.1%増）となりました。この結果、当セグメント合計の売上高は16,319百万円（同28.5%増）となりました。

セグメント利益につきましては、鶏卵相場高に伴い原料仕入単価が高騰したため一部の製品の販売単価改定を行ったこと、また前述のとおり販売数量が増加したこと、さらに工場の生産効率の向上や歩留まりの向上による製造コストの削減に努めたこと等、業績を向上させるべく様々な施策を積極的に講じた結果、1,242百万円（同9.0%増）となりました。

なお、収益認識会計基準等の適用により、従来、顧客に支払われる対価の一部を販売促進費として販売費及び一般管理費に計上しておりましたが、当期より、これら顧客に支払われる対価は売上高から控除して表示しており、この結果、売上高が34百万円減少しております。

調味料関連事業

当セグメントの売上高につきましては、既存得意先への販売増等により1,196百万円（前連結会計年度比3.8%増）となりました。

セグメント利益につきましては、上記売上高の増加及び販売費及び一般管理費の低減に努めた結果、70百万円（同130.2%増）となりました。

なお、収益認識会計基準等の適用により、得意先から受け取る対価の総額を売上高として認識していた取引のうち、顧客への商品等の提供における当社の役割が代理人に該当する取引については、顧客から受け取る対価から商品等の仕入先に支払う額を控除した純額で売上高を認識する方法に変更しており、この結果、売上高が70百万円減少しております。

その他

当セグメントは太陽光発電であり、売上高は前連結会計年度並みの24百万円となり、セグメント利益は太陽光パネルの修理等により13百万円（前連結会計年度比6.8%減）となりました。

当社グループの当連結会計年度の財政状態の分析につきましては次のとおりであります。

（資産）

当連結会計年度末の資産合計は11,759百万円となり、前連結会計年度末に比べ720百万円増加しました。

流動資産は6,824百万円となり、前連結会計年度末に比べ603百万円増加しました。主な要因は、現金及び預金の増加232百万円、商品及び製品の増加169百万円、原材料及び貯蔵品の増加153百万円等によるものであります。

固定資産は4,934百万円となり、前連結会計年度末に比べ116百万円増加しました。主な要因は、機械装置及び運搬具の増加145百万円、繰延税金資産の増加86百万円、建物及び構築物の減少96百万円等によるものであります。

（負債）

当連結会計年度末の負債合計は4,230百万円となり、前連結会計年度末に比べ85百万円減少しました。

流動負債は2,863百万円となり、前連結会計年度末に比べ306百万円増加しました。主な要因は、流動負債のそのに含まれる仮受金の増加205百万円及び未払金の増加130百万円等によるものであります。

固定負債は1,367百万円となり、前連結会計年度末に比べ391百万円減少しました。主な要因は、長期借入金の減少382百万円等によるものであります。

（純資産）

当連結会計年度末の純資産合計は7,529百万円となり、前連結会計年度末に比べ805百万円増加しました。主な要因は、親会社株主に帰属する当期純利益996百万円の計上等によるものであります。

この結果、自己資本比率は64.0%となりました。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における「現金及び現金同等物の期末残高」は、前連結会計年度末に比べ232百万円増加し2,661百万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況は次のとおりであります。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

当連結会計年度において営業活動により得られた資金は、前連結会計年度に比べ87百万円増加し1,140百万円となりました。これは主に、税金等調整前当期純利益の計上1,337百万円、減価償却費の計上374百万円等による資金の増加が、棚卸資産の増加330百万円、法人税等の支払い1456百万円等による資金の減少を上回ったことによるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

当連結会計年度において投資活動により使用された資金は、前連結会計年度に比べ71百万円増加し311百万円となりました。これは主に、有形固定資産の取得による支出307百万円等によるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

当連結会計年度において財務活動により使用された資金は、前連結会計年度に比べ284百万円増加し596百万円となりました。これは主に、長期借入金の返済による支出404百万円、配当金の支払い1213百万円等によるものであります。

生産、受注及び販売の実績

a. 生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメント	金額(百万円)	前期比(%)
鶏卵関連事業	15,689	+31.0
調味料関連事業	1,184	+12.0
合計	16,873	+29.5

（注）金額は、販売価格で表示しております。

b. 仕入実績

当連結会計年度における仕入実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメント	金額(百万円)	前期比(%)
鶏卵関連事業	658	+25.5
調味料関連事業	4	93.9
合計	663	+9.5

- (注) 1 セグメント間取引については、相殺消去しております。
2 金額は、実際仕入額で表示しております。

c. 受注実績

当社グループの製品については、概ね受注生産であります。生産と販売の関連において製品の回転が早く、月末(または期末)における受注残高が極めて少ないため、受注実績の記載を省略しております。

d. 販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメント	金額(百万円)	前期比(%)
鶏卵関連事業	16,319	+28.5
調味料関連事業	1,085	1.7
その他	24	+0.3
合計	17,430	+26.1

- (注) 1 セグメント間取引については、相殺消去しております。
2 主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合については、当該割合が100分の10以上の相手先がないため、記載を省略しております。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容

(売上高)

鶏卵関連事業につきましては、液卵売上高は、前連結会計年度に比べ29.6%増の15,219百万円となりました。これは主に、販売数量の増加や鶏卵相場(全農東京M基準値)が26.6%(45円/kg)上昇したことに伴い連動する販売単価も上昇した影響等によるものであります。なお、売上の指標である販売数量は、新規取引先の獲得や菓子メーカー向けの販売が増加したこと等により、前連結会計年度に比べ5.4%増で10期連続の増加となり、9期連続で過去最高を更新しました。加工品売上高は、卵白プロテインの販売が増加したこと等により同8.6%増の509百万円、その他売上高は同23.1%増の591百万円となりました。この結果、当セグメント合計の売上高は同28.5%増の16,319百万円となりました。

なお、収益認識会計基準等の適用により、従来、顧客に支払われる対価の一部を販売促進費として販売費及び一般管理費に計上しておりましたが、当期より、これら顧客に支払われる対価は売上高から控除して表示しており、この結果、売上高が34百万円減少しております。

調味料関連事業につきましては、既存取引先への販売が増加したこと等により前連結会計年度に比べ3.8%増の1,196百万円となりました。

なお、収益認識会計基準等の適用により、得意先から受け取る対価の総額を売上高として認識していた取引のうち、顧客への商品等の提供における当社の役割が代理人に該当する取引については、顧客から受け取る対価から商品等の仕入先に支払う額を控除した純額で売上高を認識する方法に変更しており、この結果、売上高が70百万円減少しております。

その他につきましては太陽光発電事業であり、売上高は前連結会計年度並の24百万円となりました。

この結果、セグメント間の内部売上高を除いた連結売上高は前連結会計年度に比べ26.1%増の17,430百万円となりました。

(売上総利益)

当連結会計年度における売上原価は、主に鶏卵関連事業において、鶏卵相場の上昇に伴う材料費の増加や原料仕入数量増に伴う運賃の増加、また重油価格や電気料の上昇による水道光熱費の増加等により、前連結会計年度に比べ32.4%増の14,026百万円となりました。

この結果、売上総利益は同5.3%増の3,403百万円となりました。

(営業利益)

当連結会計年度における販売費及び一般管理費は、鶏卵関連事業における販売数量の増加による運賃の増加や製品販売増加による保管数量減による保管料の減少、収益認識会計基準等の適用による販売促進費の減少、また調味料関連事業における旅費交通費の減少等により、前連結会計年度に比べ1.4%増の2,077百万円となりました。

この結果、営業利益は同11.9%増の1,325百万円となり、8期連続の増益で過去最高益となりました。

(経常利益)

営業外収益は、受取賃貸料24百万円の計上等により40百万円となりました。営業外費用は、支払利息8百万円の計上となりました。

この結果、経常利益は前連結会計年度に比べ12.2%増の1,357百万円となり、8期連続の増益で過去最高益となりました。経常利益率は7.8%となりました。

(特別損益)

特別利益は、投資有価証券売却益5百万円を計上しました。特別損失は、鶏卵関連事業の一部資産について減損損失22百万円を計上したこと等により合計24百万円となりました。

(親会社株主に帰属する当期純利益)

親会社株主に帰属する当期純利益は、前連結会計年度に比べ20.0%増の996百万円となり、3期連続の増益で過去最高益となりました。

キャッシュ・フローの状況の分析・検討内容並びに資本の財源及び資金の流動性に係る情報

当社グループの資金需要としましては、運転資金、設備投資、借入金の返済及び利息の支払、税金及び配当金の支払等であります。資金の調達手段としましては、主に、営業活動によるキャッシュ・フロー及び金融機関からの借入れにより調達しております。また、運転資金の効率的な調達のため、主要取引銀行4行と当座貸越契約を締結することで手元流動性を確保しており、金融機関との間で総額2,800百万円の契約を締結しております。本契約に基づく当連結会計年度末の借入実行残高は500百万円であります。

当連結会計年度における資金調達の状況につきましては、税金等調整前当期純利益の計上1,337百万円、減価償却費の計上374百万円等による資金の増加が、棚卸資産の増加330百万円、法人税等の支払い456百万円等による資金の減少を上回ったことにより、営業活動によるキャッシュ・フローは1,140百万円のキャッシュ・インとなりました。

なお、当期は長期借入金の借入れは行わず、設備投資については自己資金で行いました。

翌期につきましては、運転資金や経常的に発生する設備更新等については、営業活動によるキャッシュ・フローや当座貸越契約による調達、また長期借入金でまかなう予定であります。

なお、当連結会計年度におけるキャッシュ・フローの状況につきましては、「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (1)経営成績等の状況の概要 キャッシュ・フローの状況」をご参照ください。

重要な会計上の見積り及び当期見積りに用いた仮定

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成に当たって採用している会計方針は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載のとおりであります。連結財務諸表の作成においては、過去の実績やその時点での合理的と考えられる情報に基づき、会計上の見積りを行っておりますが、見積りには不確実性が伴い、実際の結果とは異なる場合があります。

なお、当期の連結財務諸表の作成にあたっては、新型コロナウイルス感染症の影響が2022年度上期以降も一定期間にわたり継続するとの仮定を置いたうえで会計上の見積りを検討しており、今後の状況の変化によっては翌連結会計年度以降の連結財務諸表において重要な影響を与える可能性があります。

当社グループは、特に以下の会計上の見積りが当社グループの連結財務諸表に重要な影響を与えるものと考えております。

a. 貸倒引当金

当社グループは、債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。なお、取引先の財政状態が予測を大幅に超えて悪化し、その支払能力が著しく低下した場合、追加引当処理が必要となる可能性があります。

b. 固定資産の減損処理

当社グループは、固定資産のうち減損の兆候がある資産又は資産グループについて、当該資産又は資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローの総額が帳簿価額を下回る場合には、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として計上しております。減損の兆候の把握、減損損失の認識及び測定に当たっては慎重に検討しておりますが、事業計画や市場環境の変化により、その見積り額の前提とした条件や仮定に変更が生じ減少した場合、減損処理が必要となる可能性があります。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

当連結会計年度の研究開発活動は、様々なお客様の用途に合った製品の研究開発に注力いたしました。
当連結会計年度における研究開発費の総額は143百万円であります。セグメントごとの研究開発活動を示すと次のとおりであります。

（鶏卵関連事業）

鶏卵関連事業の研究開発活動は、液卵メーカーとしての製品技術や製品レベルの向上を図り、顧客ニーズに応じた製品の開発を行うための卵の特性の研究などを行っております。

研究開発体制は、関東事業部の研究開発担当と製造統轄部を中心として行っており、関東事業部研究開発担当2名と製造統轄部13名の社員計15名及びそれを補佐するパート従業員数名で、大学や他の研究機関等との連携を強化し、共同開発に向けた活動を本格的に始めております。

具体的な研究開発活動は、安全・安心の面で殺菌液卵の需要が増えている中、未殺菌液卵と同等の起泡力を有する殺菌液卵の開発や顧客の用途に合った液卵等の研究開発に注力しております。その中で、殺菌製菓用卵白や液卵をベースとした新たな卵加工品について製品化が実現し、数社の顧客へ販売しております。

また、お客様の要望が強いものに的を絞った液卵の開発や品質改良に取り組んでおります。さらに、大学や他の研究機関等との連携を図り、鶏卵の新規用途の可能性や、卵殻等の廃棄物の有効利用のための研究を行ってまいります。

当連結会計年度における当事業の研究開発費の総額は128百万円であります。

（調味料関連事業）

調味料関連事業の研究開発体制は、研究開発部3名で行っており、粉末状態のものを高温で加熱処理することが可能な特殊な加工設備を有し、この技術を活用して商品開発を進めております。また、造粒加工や粉体混合等、当社グループが持つ各生産設備を個別に完結させることなく連携することで、単一の生産設備では成し得ない複合的な商品開発も進めており、原料の選定や配合を変えることで無数の商品開発が可能になります。これにより、昨今細分化されている複雑な味の要求にもフレキシブルに対応しております。

これに加え、開発担当者が営業担当者とチームを作り、お客様の様々な要望に応えるために、直接訪問し対話することで、お客様の意図や嗜好性を把握しながら商品開発を進めております。

当連結会計年度における当事業の研究開発費の総額は15百万円であります。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度中に実施した設備投資総額は、442百万円となりました。セグメントごとの設備投資等の概要は次のとおりであります。

(1) 鶏卵関連事業

当連結会計年度の主な設備投資については、液卵製造設備の更新等、総額432百万円の投資を実施しました。

(2) 調味料関連事業

当連結会計年度の主な設備投資については、調味料製造設備の更新等、総額9百万円の投資を実施しました。

(3) その他

当連結会計年度は、遠隔監視システムの導入に伴う0百万円の投資を実施しました。

2 【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2022年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)
			建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積㎡)	その他	合計	
福岡事業部及び本社 (福岡県糟屋郡粕屋町)	鶏卵関連事業	事務所・ 液卵製造設備	93	105	433 (14,718.51)	16	649	44[107]
関東事業部 (茨城県水戸市)	鶏卵関連事業 その他	液卵製造設備	1,033	627	407 (18,940.00)	6	2,075	36[100]
名古屋事業部 (愛知県安城市)	鶏卵関連事業	液卵製造設備	152	86	471 (4,424.69)	4	715	15[29]
関西事業部 (京都府綴喜郡井手町)	鶏卵関連事業 その他	液卵製造設備	274	193	486 (18,407.55)	2	956	15[68]

- (注) 1 帳簿価額のうち「その他」は、「工具、器具及び備品」であります。
 2 従業員数の[]は、臨時従業員数を外数で表示しております。
 3 臨時従業員には、定年後の再雇用者、パートタイム従業員及びアルバイトを含み、派遣社員を除いております。
 4 当連結会計年度より、定年後の再雇用者は、従業員数から除き臨時従業員数に含めております。

(2) 国内子会社

2022年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)
				建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積㎡)	その他	合計	
日本化工 食品株式 会社	千葉工場 (千葉県市原市)	調味料関連事業 その他	業務用粉体調味料 及び顆粒調味料 製造設備等	134	48	117 (4,132.54)	7	307	28[20]

- (注) 1 帳簿価額のうち「その他」は、「工具、器具及び備品」であります。
 2 従業員数の[]は、臨時従業員数を外数で表示しております。
 3 臨時従業員には、定年後の再雇用者、パートタイム従業員及びアルバイトを含み、派遣社員を除いております。
 4 当連結会計年度より、定年後の再雇用者は、従業員数から除き臨時従業員数に含めております。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

該当事項はありません。

(2) 重要な設備の除却等

経常的な設備更新のための除却等を除き、重要な設備の除却等の計画はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	16,792,000
計	16,792,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2022年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2022年6月29日)	上場金融商品取引所名又は 登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	8,345,370	8,345,370	東京証券取引所 市場第一部(事業年度末現在) スタンダード市場(提出日現在) 福岡証券取引所	単元株式数 100株
計	8,345,370	8,345,370		

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2013年7月1日	2,781,790	8,345,370		455		366

(注) 2013年7月1日に、2013年6月30日の株主名簿に記録された株主に対し、1株につき1.5株の割合をもって分割いたしました。

(5) 【所有者別状況】

2022年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)		14	14	75	17	6	5,226	5,352	
所有株式数(単元)		10,941	1,201	17,514	373	6	52,837	82,872	58,170
所有株式数の割合(%)		13.20	1.45	21.13	0.45	0.01	63.76	100.00	

(注) 自己株式133,606株は「個人その他」に1,336単元、「単元未満株式の状況」に6株含まれております。なお、期末日現在の実質的な所有株式数は、133,606株であります。

(6) 【大株主の状況】

2022年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
株式会社将コーポレーション	福岡市東区香椎照葉2丁目3-24	995	12.12
宇高 紫乃	山口県山口市	712	8.68
宇高 真一	山口県山口市	413	5.03
宇高 和真	山口県山口市	410	5.00
株式会社福岡銀行	福岡市中央区天神2丁目13-1	394	4.81
藤井 将徳	福岡市東区	362	4.42
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	340	4.14
宇高 悠真	山口県山口市	277	3.38
藤井 智徳	福岡市東区	266	3.25
藤井 宗徳	福岡市東区	211	2.58
計		4,384	53.40

(注) 前事業年度末現在主要株主であった藤井宗徳氏は、当事業年度末では主要株主ではなくなり、株式会社将コーポレーションが新たに主要株主となりました。

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2022年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 133,600		
完全議決権株式(その他)	普通株式 8,153,600	81,536	
単元未満株式	普通株式 58,170		
発行済株式総数	8,345,370		
総株主の議決権		81,536	

(注) 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式6株が含まれております。

【自己株式等】

2022年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) イフジ産業株式会社	福岡県糟屋郡粕屋町 戸原東二丁目1番29号	133,600		133,600	1.60
計		133,600		133,600	1.60

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(百万円)
当事業年度における取得自己株式	195	0
当期間における取得自己株式		

(注) 当期間における取得自己株式には、2022年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(百万円)	株式数(株)	処分価額の総額(百万円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
その他(譲渡制限付株式報酬に係る自己株式の処分)	33,200	30		
その他(単元未満株式の買増請求による売渡)				
保有自己株式数	133,606		133,606	

(注) 当期間における保有自己株式数には、2022年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数及び買増請求による売渡株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当社グループは、株主の皆様に対する適切な利益還元を重要な経営目標と位置付けております。

また、当社の属する液卵業界において市場競争力を確保し、シェア及び収益の向上を図るためには、製造設備、研究開発等の積極的な投資が必要であると考えております。

株主に対する利益還元の基本方針としましては、経営体質の強化や今後の事業展開を勘案した内部留保にも留意しつつ、連結ベースの目標配当性向25%～30%とし、中間配当及び期末配当の年2回としております。

当社は会社法第459条の規定に基づき、取締役会の決議によって剰余金の配当(期末配当)を行うことができる旨を定款に定めております。

当事業年度の剰余金の配当につきましては、中間配当は1株当たり12円を実施し、期末配当は1株当たり16円といたしました。

なお、当社は「取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として中間配当を行うことができる」旨を定款に定めており、この配当の決定機関は取締役会であります。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)
2021年11月11日 取締役会決議	98	12
2022年6月28日 定時株主総会決議	131	16

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに対する基本的な考え方

当社グループは、株主から託された資本を用いて事業活動を行い、企業価値を増大させることが大きな使命の一つであると考えております。また、当社は公開会社でもあることから、株主の負託に応えることはもちろん、お取引先、地域社会や地域住民の方々、従業員等に対する社会的責任を果たしていくこと、全ての株主について平等に扱うこと、株主の権利行使の環境整備を行うこと、株主との対話を促進することも重要な責務であると認識しております。このような認識のもと、当社は毎月取締役会を開催し、毎月の業務報告を行い、また、経営上の諸問題を討議し、的確な意思決定や業務執行、並びに監督・監視ができる体制を構築しております。そのほか、会計上の問題や企業倫理、法令上の問題については、監査法人（会計監査人）や顧問弁護士等に随時相談し、コンプライアンス（法令遵守）に努めております。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

イ 企業統治の体制の概要

当社の企業統治の体制は、主に「取締役会」、「監査役会」、「会計監査人」、「指名・報酬諮問委員会」で構成されております。

取締役会は、有価証券報告書提出日現在で7名の取締役で構成されており、社内取締役5名、社外取締役2名であります。取締役会の議長は、代表取締役社長 藤井宗徳が務めております。その他の構成員は、取締役創業者会長 藤井徳夫、常務取締役 池田賢次郎、取締役 原 敬、取締役 見島正文、社外取締役 川原正孝、社外取締役 中川正裕であります。毎月の定例の取締役会のほか、必要に応じて臨時取締役会を開催しております。取締役会では、月次の業務報告のほか、法令、定款及び取締役会規程に定められた事項について審議しており、取締役相互に質疑、提案並びに意見交換し、取締役相互に業務執行状況を監督しております。なお、取締役会には全ての監査役が出席し、取締役の業務執行状況を監視できる体制となっております。

監査役会は、有価証券報告書提出日現在で、常勤監査役 渡邊明治、監査役 高宮哲郎、監査役 近藤隆志の計3名で構成されており、全員社外監査役であります。監査役会は、原則毎月の定例監査役会のほか、必要に応じて臨時監査役会を開催しております。常勤監査役は、取締役会のほか、毎月開催の事業部長会議等の重要な会議に出席し、必要に応じて意見を述べる等、常に取締役の業務執行を監視できる体制となっております。

会計監査人は、当社とは利害関係のない有限責任監査法人トーマツを選任しております。公正不偏な立場から監査を実施しております。各四半期決算時及び期末決算時には、会計監査人と当社の代表取締役社長、取締役経営企画部長、監査役、内部監査室長、管理部門の責任者が一堂に会し、会計監査について報告を受けるとともに、議論しております。

指名・報酬諮問委員会は、取締役の指名、報酬等に係る取締役会の機能の独立性・客観性と説明責任を強化することを目的として設置している取締役会の諮問機関であります。指名・報酬諮問委員会は、有価証券報告書提出日現在で、社外取締役 川原正孝、社外取締役 中川正裕、代表取締役社長 藤井宗徳の計3名で構成されており、委員長は社外取締役 川原正孝であります。指名・報酬諮問委員会は、取締役会の諮問に応じてその内容を審議し、その内容を取締役会へ答申・報告しております。当事業年度においては、取締役の選解任に関する基本方針を審議いたしました。また、報酬に関しては、個々の取締役の報酬について審議し取締役会に答申いたしました。

ロ 企業統治の体制を採用する理由

取締役は社内取締役5名、社外取締役2名で、社内取締役は定例の取締役会及び随時に取締役間の打合せを行い、円滑な業務執行と取締役間の執行監視を行っております。また、社外取締役が独立的な立場から業務執行について厳正な監視や提言を行っております。

監査役は全員社外監査役であり、取締役会その他重要な会議に出席し、豊富な知識経験をもとに独立した立場から経営に対する監視並びに取締役等の業務執行の監査を行っており、十分な企業統治の体制が図られていると考えております。

企業統治に関するその他の事項

イ 内部統制システム及びリスク管理体制の整備状況

当社は、取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制その他業務の適正を確保するための体制を整備するため、取締役会において「内部統制システムの基本方針」を決議しております。

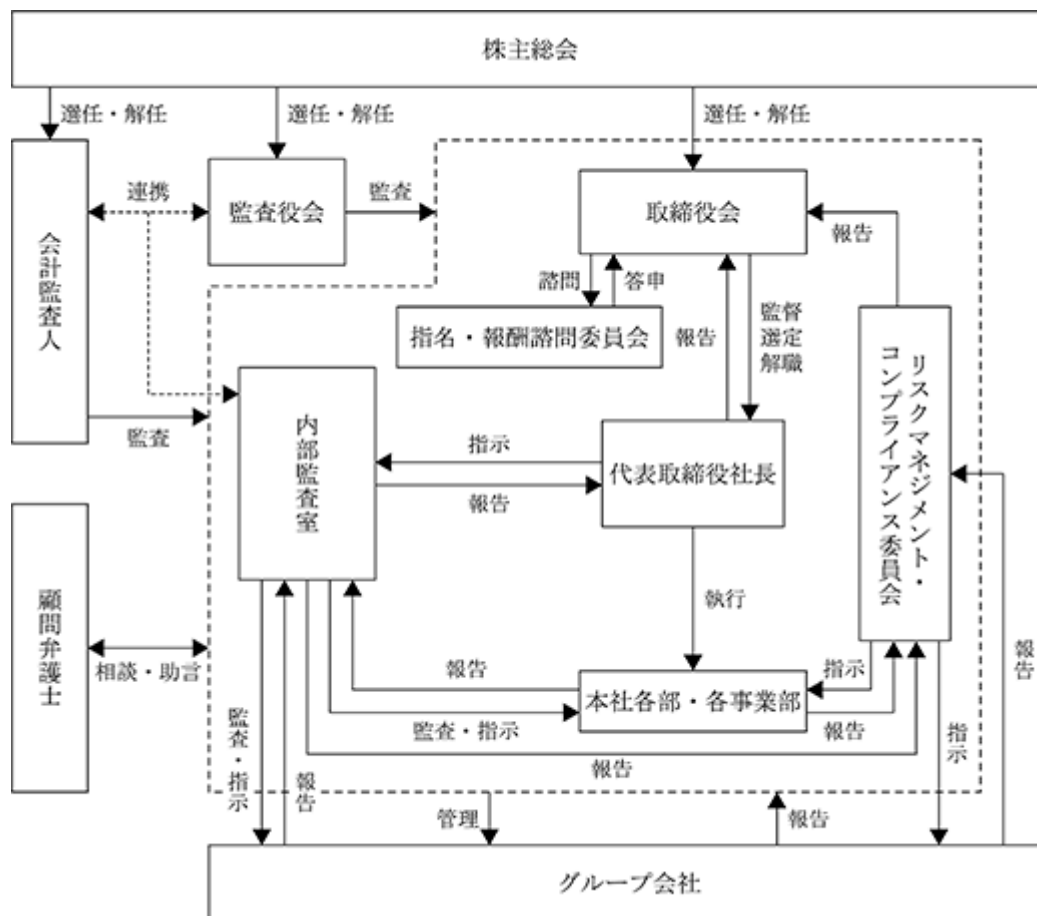
リスク管理体制及びコンプライアンス体制につきましては、当社のリスク及びコンプライアンスを管理するため、社長直轄の「リスクマネジメント・コンプライアンス委員会」を設置しております。また、同委員会の活動を補助するために、「経営部会」、「営業部会」、「購買部会」、「製造部会」、「子会社部会」の専門部会を設置し、各専門部会ごとに現状及び今後直面することが予測されるリスクを分析・評価したうえで、優先的に対応すべきリスクを抽出し、その管理体制及び方法等について必要な規程を整備しております。

さらに、会社及び社員の行動指針と各部門における事業活動の基準を定めた「企業活動の基本方針と行動指針～私たちの行動基準～」を作成し、コンプライアンス研修を定期的開催するなど、社員のコンプライアンス意識の強化に努めております。

ロ 提出会社の子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

当社は、子会社に関する管理基準を関係会社管理規程に定めており、子会社の経営については当社取締役もしくは幹部社員を取締役として派遣し、事業内容の定期的な報告や重要案件については事前協議を行うなど、当社の業務執行に沿った業務執行を行うとともに、業務執行を監督しております。

当社の企業統治の体制を図で示すと次のとおりであります。



八 取締役の定数

当社の取締役は、12名以内とする旨を定款に定めております。

二 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行い、累積投票によらないものとする旨を定款に定めております。

ホ 自己株式の取得について

当社は、自己株式の取得について、経済情勢の変化に対応して財務政策等の経営諸施策を機動的に遂行することを可能とするため、会社法第165条第2項の規定に基づき、取締役会の決議によって自己株式を取得することができる旨を定款で定めております。

へ 中間配当

当社は、株主への機動的な利益還元を可能にするため、会社法第454条第5項の規定に基づき、取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。

ト 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

チ 責任限定契約

当社と各社外取締役及び各社外監査役は、会社法第427条第1項に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。その契約内容の概要は次のとおりであります。

- ・社外取締役及び社外監査役が任務を怠ったことによって当社に損害賠償責任を負う場合は、会社法第425条第1項の最低責任限度額を限度としてその責任を負う。
- ・上記の責任限定が認められるのは、社外取締役及び社外監査役がその責任の原因となった職務の執行について善意でかつ重大な過失がない時に限るものとする。

リ 剰余金の配当等の決定機関

当社は、資本政策及び配当政策を機動的に遂行することが可能となるよう、剰余金の配当（期末配当）等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めがある場合を除き、取締役会決議によって定めることができる旨を定款で定めております。

ヌ 役員等賠償責任保険契約

当社は、会社法第430条の3第1項の規定に基づき、役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結し、被保険者が当社役員としての業務につき行った行為に起因して、被保険者に対し損害賠償請求がなされた場合の損害賠償金及び争訟費用を填補することとしております。ただし、被保険者が違法に利益または便宜を得たこと、法令等に違反することを認識しながら行った行為に起因する損害は填補されないなど、一定の免責事由があります。

当該役員等賠償責任保険契約の被保険者は当社取締役及び監査役であり、全ての被保険者について、その保険料を全額当社が負担しております。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性10名 女性 名 (役員のうち女性の比率 %))

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (株)
取締役 創業者会長	藤井 徳夫	1941年2月13日生	1964年4月 1972年10月 2014年6月 2017年6月 2019年8月	藤井養鶏場創業 当社設立 代表取締役社長就任 当社取締役会長就任 当社取締役創業者会長就任(現任) 日本化工食品株式会社代表取締役 会長兼社長就任	(注)1	203,775
代表取締役 社長	藤井 宗徳	1975年6月2日生	1999年4月 2003年3月 2006年3月 2007年6月 2008年3月 2009年11月 2009年11月 2011年6月 2014年6月 2022年2月	当社入社 当社名古屋事業部次長 当社関東事業部長代理 当社取締役就任 当社常務取締役就任 当社専務取締役就任 日本化工食品株式会社代表取締役 社長就任 当社経営企画室担当 当社代表取締役社長就任(現任) 日本化工食品株式会社代表取締役 社長就任(現任)	(注)1	211,800
常務取締役 関東事業部長 東日本(関東事業部・ 名古屋事業部)担当	池田 賢次郎	1959年3月29日生	1981年4月 1996年4月 1998年6月 1999年4月 2003年6月 2011年6月 2019年6月	当社入社 当社関東事業部長(現任) 当社取締役就任 当社名古屋事業部長 当社常務取締役就任(現任) 当社名古屋事業部担当 当社東日本(関東事業部・名古屋 事業部)担当(現任)	(注)1	44,965
取締役 経営企画部長 総務部担当	原 敬	1971年2月4日生	1994年4月 2006年3月 2009年11月 2011年6月 2012年1月 2019年8月 2020年4月 2021年6月	当社入社 当社経営企画室次長 日本化工食品株式会社取締役 工場長就任 当社取締役総務部長就任 当社経営企画室担当 日本化工食品株式会社監査役 就任 当社取締役経営企画部長兼総務部 担当就任(現任) 日本化工食品株式会社取締役就任 (現任)	(注)1	14,750
取締役 購買統轄部長 西日本(関西事業部・ 福岡事業部)担当	見島 正文	1957年11月2日生	1982年1月 2005年6月 2011年6月 2011年6月 2019年6月	当社入社 当社営業統轄部長 当社取締役購買統轄部長就任 (現任) 当社製造統轄部担当 当社西日本(関西事業部・福岡事 業部)担当(現任)	(注)1	19,900
取締役	川原 正孝	1950年3月18日生	1973年4月 1979年10月 1986年4月 1994年4月 1997年1月 2014年6月 2017年4月	株式会社福岡相互銀行(現株式会 社西日本シティ銀行)入行 株式会社ふくや入社 同社常務取締役就任 同社代表取締役副社長就任 同社代表取締役社長就任 当社取締役就任(現任) 株式会社ふくや代表取締役会長 (現任)	(注)1	50,000

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	中川 正裕	1949年7月27日生	1973年4月 株式会社日本興業銀行(現株式会社みずほ銀行)入行 2000年11月 九州電力株式会社入社 2007年6月 同社執行役員長崎支店長 2010年6月 九州ビジネスソリューションズ株式会社代表取締役社長 2014年6月 一般社団法人九州経済連合会専務理事 2017年6月 同法人顧問(現任) 2020年6月 当社取締役就任(現任)	(注)1	1,000
監査役 (常勤)	渡邊 明治	1948年5月8日生	1971年4月 株式会社西日本相互銀行(現株式会社西日本シティ銀行)入行 1995年10月 同行国際部次長兼宮崎国際業務室長 1996年7月 同行本店営業部次長 2002年2月 株式会社西銀経営情報サービス(現株式会社NCBリサーチ&コンサルティング)出向 部長 2004年4月 財団法人西日本銀行国際財団(現公益財団法人西日本国際財団)事務局長 2009年4月 香蘭女子短期大学 非常勤講師(金融論・銀行論)(現任) 2021年6月 当社監査役就任(現任)	(注)2	
監査役	高宮 哲郎	1945年2月8日生	1968年4月 株式会社西日本相互銀行(現株式会社西日本シティ銀行)入行 1999年6月 前田証券株式会社(現FFG証券株式会社)常務取締役 2002年6月 同社専務取締役 2009年6月 当社監査役就任(現任)	(注)2	
監査役	近藤 隆志	1949年8月7日生	1974年9月 九州松下電器株式会社(現パナソニックシステムソリューションズジャパン株式会社)入社 1998年6月 同社取締役 2008年4月 同社専務取締役 2010年6月 当社監査役就任(現任)	(注)2	5,000
計					551,190

- (注) 1 取締役の任期は、2022年3月期に係る定時株主総会終結の時から2023年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 2 監査役の任期は、2021年3月期に係る定時株主総会終結の時から2025年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 3 代表取締役社長 藤井宗徳氏は、取締役創業者会長 藤井徳夫氏の次男であります。
- 4 取締役 川原正孝氏及び中川正裕氏は、社外取締役であります。
- 5 監査役3氏は、社外監査役であります。
- 6 当社は、法令に定める監査役の数に欠けることになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役1名を選任しております。補欠監査役の略歴は以下のとおりであります。

氏名 (生年月日)	略歴	所有株式数 (株)
越智 春男 (1956年11月25日)	1991年11月 当社入社 2000年6月 当社総務部総務課長 2004年3月 当社福岡事業部営業グループ課長 2011年6月 当社内部監査室長(現任) 2021年6月 日本化工食品株式会社監査役就任(現任)	3,488

社外役員の状況

当社の社外取締役は2名であります。

社外取締役 川原正孝氏は、長年にわたり株式会社ふくやの経営トップを務めており、企業経営に関する豊富な経験と幅広い見識に基づき、当社の経営を監督するとともに、当社の経営全般に助言をすることによりコーポレート・ガバナンスの強化に寄与するため選任しております。同氏はこのほか、株式会社ホークスタウンの社外取締役及び福岡地所株式会社の社外監査役を兼職しております。なお、株式会社ふくやと当社との間には当社製品売買の取引はありますが、その取引額は50万円未満、当社売上高の0.1%未満と僅少であり、またその取引条件は通常の取引先と同様です。したがって、同氏は社外取締役として制約を受けずに客観的な立場から業務を遂行できると考えております。同氏は当社株式0.60%(50,000株)を保有しております。

社外取締役 中川正裕氏は、銀行、事業会社等、幅広い業種の企業経営や経済団体への参画に基づく豊富な経験と高い見識を有しております。同氏の経営者としての豊富な経験と幅広い見識に基づき、当社の経営全般に助言をするとともに、コーポレート・ガバナンスの強化に寄与するため選任しております。なお、同氏が過去に在籍していた九電ビジネスソリューションズ株式会社と当社との間には取引関係はありません。従って、同氏は社外取締役として制約を受けずに業務を遂行できると考えております。同氏は当社株式0.01%(1,000株)を保有しております。

当社の監査役3名は、全員社外監査役であります。

社外監査役 渡邊明治氏は、銀行や経営コンサルティング会社等での業務経験に加え、教育機関で金融論等の教鞭を取るなど、財務及び会計に関する高い知見を有しております。その豊富な経験や高い知見に基づき、当社の監査体制やコンプライアンスの強化に寄与してもらうため選任しております。なお、同氏が過去に在籍していた株式会社西日本相互銀行(現 株式会社西日本シティ銀行)は当社との取引はありません。従って、同氏は社外監査役として制約を受けずに業務を遂行できると考えております。

社外監査役 高宮哲郎氏は、銀行での審査業務及び支店長経験や証券会社で専務取締役を務めた経験を有しており、財務分析やリスク管理等に高い知見を有しております。その豊富な経験や高い知見に基づき、当社の監査体制やコンプライアンスの強化に寄与してもらうため選任しております。なお、同氏が過去に在籍していた前田証券株式会社(現 FFG証券株式会社)は当社の幹事証券であります。現在、同社と当社との取引はありません。また、同氏が過去に在籍していた株式会社西日本銀行(現株式会社西日本シティ銀行)と当社との間に取引関係はありません。したがって、同氏は社外監査役として制約を受けずに業務を遂行していると考えております。

社外監査役 近藤隆志氏は、九州松下電器株式会社(現パナソニックシステムソリューションズジャパン株式会社)の専務取締役を務めた経験を有しており、その豊富な知識や幅広い経験等に基づき、当社の経営全般に対して助言を得るため選任しております。なお、同社と当社との取引はありません。また、同氏は当社株式0.06%(5,000株)を保有しております。

上記以外に、社外取締役及び社外監査役との人的関係、資本的關係または取引関係その他の利害関係はありません。

なお、上記社外取締役2名及び社外監査役3名については、一般株主と利益相反の生じる恐れがないと判断し、株式会社東京証券取引所に対し、独立役員として届け出ております。

当社は、社外取締役を選任するための独立性に関する基準及び方針について以下のように定めております。

- ・東京証券取引所の定める独立性基準の要件に合致する者
- ・経営者等として豊富な経験と知識を有し、独立性・中立性のある者

また、社外監査役を選任するための基準及び方針については以下のように定めております。

- ・常に公正不偏の態度を保持し、自らの信念に基づき行動できる者
- ・経営全般の見地から経営課題についての認識を深め、経営状況の推移と企業をめぐる環境の変化を把握し、能動的・積極的に意見を述べることができる者

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役と社外監査役及び社外監査役と代表取締役は連携強化のため、取締役会の前後に情報交換するとともに、年に2～3回意見交換会を開催しております。

当社の監査役は全員社外監査役であり、取締役会には監査役全員が出席し経営に対する監視並びに取締役の業務執行の監査が行われております。事業部長会議、リスクマネジメント・コンプライアンス委員会等の重要な会議には常勤監査役及び非常勤監査役が出席し、中立的な立場から意見を述べるなど、監査役による業務執行を監視する機能が有効に機能していると考えております。

また、監査役は、内部監査室及び会計監査人と随時情報交換や意見交換を行うほか、定期的に三者によるミーティングを行う等連携を密にし、監査の効率化等、監査機能の向上を図っております。

内部監査室と監査役は、監査計画等について協議するとともに、適宜情報交換を行い、監査実施に向けて相互に連携を図っております。また、監査役は内部監査室が実施する内部監査に立会うとともに、当社各部の業務執行状況について確認を行うなど、監査の実効性の強化に努めております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

a. 組織・人員

当社は監査役会設置会社であり、常勤監査役1名及び非常勤監査役2名で構成されております。監査役3名は社外監査役であり、東京証券取引所に独立役員として届けております。

b. 監査役会の活動状況

当事業年度において監査役会は13回開催いたしました。常勤監査役 渡邊明治氏は、監査役に就任後開催された監査役会10回の全てに出席しております。監査役 高宮哲郎氏及び監査役 近藤隆志氏は、すべての監査役会に出席しております。

監査役会は、原則毎月1回の定例監査役会のほか、必要に応じて臨時監査役会を開催しております。

監査役会では、当事業年度は年間を通じて次のような報告、審議・協議、決議を行いました。

報告：常勤監査役・監査役会報告事項、36協定遵守状況等、監査役が共有すべき事項

審議・協議：取締役会議案に関する事項、会計監査人の評価及び再任・不再任、監査役会監査報告書案等

決議：監査役監査方針・監査計画・職務分担、会計監査人の評価及び再任・不再任、監査報告書案等

このほか、社長との意見交換会、社外取締役との情報交換会、あるいは社長とすべての社外役員との合同での情報交換会を監査役会主催で開催し、意見交換、情報交換を行っております。

c. 監査役の活動状況

当社における監査役監査は、監査役会で策定した監査の方針、および業務分担に従い、当社および子会社の業務全般について、常勤監査役を中心として計画的かつ網羅的な監査を実施しております。

当事業年度においては、13回開催された取締役会について、常勤監査役 渡邊明治氏は、監査役に就任後開催された取締役会10回の全てに出席し、監査役 高宮哲郎氏は、すべての取締役会に出席しております。監査役 近藤隆志氏は、13回開催された取締役会のうち11回に出席しております。

監査役は、取締役会の議事運営、決議内容等を監査し、必要により質問、意見表明を行っております。

監査役は、日常の重要書類(重要会議議事録、稟議決裁書類、契約書等)を閲覧・確認しているほか、月次開催のリスクマネジメント・コンプライアンス委員会、及び本社部門長・各事業部長出席の事業部長会議等の重要会議に出席し、提言のほか監査をしております。また、会計監査人からの監査計画説明会、四半期レビュー報告会、監査結果報告会等に出席し、必要に応じて意見陳述を行う等、常に取締役の業務執行を監視できる体制となっております。また、内部監査室及び会計監査人と四半期ごとの三者によるミーティング(三様監査会議)を行う等連携を密にし、監査の効率化等、監査機能の向上を図っております。

常勤監査役は本社各部門、各事業部、子会社に対し年1回往査を行い、取締役の業務執行の各部門等における実態及びその適法性・妥当性につき、実地にて確認しております。このほか、社内回覧、掲示板、稟議書閲覧等により、監査役全員が共有すべき事項につき、定例監査役会等において「常勤監査役・監査役会報告事項」として報告し、監査役間での情報共有を図っております。

d. 各監査役の経験および知見

常勤監査役 渡邊明治氏は、銀行や経営コンサルティング会社等での業務経験に加え、教育機関で金融論等の教鞭を取るなど、財務及び会計に関する高い知見を有しております。

監査役 高宮哲郎氏は、長年の金融機関勤務において、システムの企画・開発経験、並びに多くの企業の財務内容を審査してきた経験から、財務分析やリスク管理に関する相当程度の知見を有しており、加えて、証券会社においてコンプライアンス担当役員を務め、コンプライアンス管理に関しても相当程度の知見を有しております。

監査役 近藤隆志氏は、長年の大手電気機器メーカー勤務において、開発・製造部門における技術本部長を務めるなど、製造管理・品質管理等の豊富な知識・経験を持ち、当社監査役就任前は当該メーカーの専務取締役として経営全般に従事し、その経歴から経営全般に関する相当程度の知見を有しております。

内部監査の状況

内部監査につきましては、代表取締役社長直属の内部監査室(2名)を設置し、内部監査規程に基づき監査計画を策定し、業務の適正な運営状況、業務実施の有効性及び正確性、コンプライアンスの遵守状況等について監査を定期的に行い、代表取締役社長に報告しております。

また、内部監査結果および是正状況については、常勤監査役および定例の監査役会に報告し、意見交換を行っております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

有限責任監査法人トーマツ

b. 継続監査期間

26年間

c. 業務を執行した公認会計士

寺田 篤芳

吉田 秀敏

d. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士10名、会計士試験合格者等7名、その他3名であります。

e. 監査法人の選定方針と理由

当社が監査法人を選定するに当たって、監査法人の沿革と監査実績、当社が属する業界に関する知見、公認会計士法に基づく処分や会社法上の欠格事由の有無、監査法人の品質管理体制、監査法人の独立性、専門性、監査の実施体制、グローバル化への対応、監査テクノロジー、監査報酬見積額等の適切性を考慮するものとしており、これらを総合的に勘案した結果、有限責任監査法人トーマツは適任であると判断したものであります。

当社では、会計監査人が職務上の義務に違反し、または職務を怠り、もしくは会計監査人としてふさわしくない非行があるなど、当社の会計監査人であることにつき当社にとって重大な支障があると判断した場合には、監査役会が会社法第340条の規定により会計監査人を解任いたします。また、そのほか会計監査人が職務を適切に遂行することが困難であると認められる場合、または監査の適正性をより高めるために会計監査人の変更が妥当であると判断される場合には、監査役会は、会計監査人の選任及び解任並びに会計監査人を再任しないことに関する議案の内容を決定します。

f. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社の監査役及び監査役会は、監査法人に対して評価を行っております。この評価については、日本監査役協会が公表する「会計監査人の評価及び選定基準策定に関する監査役等の実務指針」及び監査法人が定めたガバナンス・コードを踏まえ、会計監査人とのコミュニケーションを通じて、監査チームの独立性、監査計画の内容、特別な検討を必要とするリスク等及び不正リスクへの対応並びにそれらの監査結果、経営者等とのコミュニケーションの状況等を評価し、さらに最近の日本公認会計士協会の品質管理レビュー及び公認会計士・監査審査会による検査の内容及びその対応状況も考慮した監査法人の品質管理体制を勘案して評価しております。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	25		25	
連結子会社				
計	25		25	

b. 監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬 (a. を除く)

該当事項はありません。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

当社では監査報酬の決定について明確な方針は設けておりませんが、監査公認会計士等からの見積提案をもとに、前期の監査実績、監査計画、監査内容、監査日数等を勘案して検討し、監査役会の同意を得て監査報酬額を決定しております。

e. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社の監査役会は、日本監査役協会が公表する「会計監査人との連携に関する実務指針」を踏まえ、監査計画における監査時間及び監査報酬の推移並びに過年度の監査計画と実績の状況を確認し、報酬額の見積りの妥当性を検討した結果、会計監査人の報酬等につき、会社法第399条第1項の同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社は、取締役会決議により、取締役の個人別の報酬等の内容に係る決定方針については、役員報酬規程に定めております。

基本方針は、以下のとおりであります。

- (1) 当社の役員報酬は以下の方針に従うものとする。
 - ・当社の持続的成長と長期的な企業価値向上に資するものであること
 - ・何によって報酬が高まるかがわかり、役員の役割・責任意識を高めるとともに、優秀な人材を確保・維持できる報酬基準であること
 - ・透明性、客観性を備えた設計であり、これを担保する適切なプロセスを経て決定されること
- (2) 報酬水準については、業績および時価総額等の企業価値指標において同程度の企業の水準を十分に考慮する。その上で、企業全体の求心力となり、社業の創造・発展に多大な貢献のある者に対し、類似他企業に見られる範囲で、貢献に応じ水準が高まる設計とする。
- (3) 取締役報酬（社外取締役に対するものを除く）は、固定報酬と変動報酬で構成する。変動報酬は、短期インセンティブ報酬と中長期インセンティブ報酬で構成し、固定報酬額の割合を1としたときに、短期インセンティブ報酬の支給額は0～3分の2、中長期インセンティブ報酬の支給額は0～3分の1の範囲で変動するものとする。
- (4) 短期インセンティブ報酬は、中長期のゴールに向けた単年度業績に対する役員のコミットメントに対応するものと位置づけ、全社利益に基づき決定する。
- (5) 中長期インセンティブ報酬は、株価変動のメリットとリスクを株主と共有し、長期的な企業価値の持続的向上を図る観点から、株式報酬を導入する。
- (6) 役員報酬の決定にあたっては、透明性・客観性を確保するために、取締役会の諮問機関である指名・報酬諮問委員会に諮問する。個人別の取締役報酬については、指名・報酬諮問委員会の審議を経た上で、最終的に取締役会が決定する。

固定報酬及び賞与については、2012年6月27日開催の定時株主総会決議により取締役報酬限度額を年額300百万円以内としております。また、譲渡制限付株式報酬については、別枠として2020年6月25日開催の定時株主総会において金銭報酬債権として年額60百万円以内とし、当社の企業価値の持続的な向上を図るインセンティブを与えるとともに、株主の皆様との一層の価値共有を進めることを目的として、社外取締役を除く取締役に対して導入しております。

取締役の固定報酬については、個々の役位等に基づく報酬額を設けております。

取締役の変動報酬（業績連動報酬）については、当社の持続的成長と長期的な企業価値向上に向けた健全なインセンティブが機能するように短期インセンティブ報酬として賞与を、中長期インセンティブとして譲渡制限付株式報酬を適切な割合にて設定できるように、固定報酬額の割合を1としたときに、短期インセンティブ報酬の支給額は0～3分の2、中長期インセンティブ報酬の支給額は0～3分の1の範囲で変動するものとしております。評価指標は、連結経常利益を採用しており、原則として、公表された連結経常利益予想の75%未満の場合はいずれも支給しません。賞与については、役位等に基づく基準額に前事業年度の連結経常利益達成度係数を乗算して算出します。連結経常利益達成度係数は、以下の計算により算出します。

$(\text{連結経常利益実績} \div \text{公表した連結経常利益予想} - 0.5) \times 2$ （小数点以下第3位切り上げ）

ただし、連結経常利益達成度係数の上限を2とし、計算結果が0.5未満の場合は係数を0とします。

また、連結経常利益予想または実績が0以下の場合は、連結経常利益達成度係数は0とします。

当該指標を選択した理由は、公表した数値であり、収益性を示す基準として明確であることに加え、当社の持続的成長にとって重要な経営指標であるためであります。

社外取締役については、固定報酬のみを支給しており、業績により変動する要素はありません。

取締役報酬の決定については、独立社外取締役が委員長となる指名・報酬諮問委員会から答申を受け、株主総会で決議された取締役報酬総額の範囲内で、取締役会の決議により決定いたします。

指名・報酬諮問委員会は、取締役会の任意の諮問機関として、独立かつ客観的な立場から役員報酬制度の在り方を含めた報酬体系及び報酬額の妥当性について審議し、取締役会に答申しております。

指名・報酬諮問委員会の活動状況は、当事業年度において3回開催し、2021年6月25日開催の指名・報酬諮問委員会において個々の取締役の報酬について審議し、その結果を取締役に答申しました。

当事業年度に係る取締役の個人別の報酬等の内容の決定にあたっては、指名・報酬諮問委員会が原案について決定方針との整合性を含めた多角的な検討を行っているため、取締役会も基本的にその答申を尊重し決定方針に沿うものであると判断しております。

監査役の報酬については、2006年6月27日開催の定時株主総会決議により報酬限度額を年額50百万円以内としており、その範囲内において監査役の協議により決定しております。

監査役の報酬は、固定報酬のみを支給しており、業績により変動する要素はありません。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)				対象となる 役員の員数 (名)
		固定報酬	業績連動報酬	退職慰労金	左記のうち、 非金銭報酬等	
取締役 (社外取締役を除く)	192	115	77		30	5
監査役 (社外監査役を除く)						
社外役員	15	15				6

- (注) 1 取締役の報酬等の総額には、使用人兼務取締役に対する給与相当額は含まれておりません。
2 業績連動報酬のうち、賞与は前連結会計年度に公表した連結経常利益予想が1,057百万円であり、前連結会計年度の連結経常利益は1,210百万円となったことから、役位等に基づく基準額に連結経常利益達成度係数1.29を乗算した額を支給しております。
3 非金銭報酬等として、社外取締役を除く取締役に対して譲渡制限付株式報酬を支給しております。
4 非金銭報酬等の額は、譲渡制限付株式報酬として当期中に費用計上した額を記載しております。

役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、投資株式について、専ら株式の価値の変動または配当の受領によって利益を得ることを目的として保有する株式を純投資目的である投資株式、それ以外の株式を純投資目的以外の目的である投資株式に区分しております。当社は、中長期的な観点から当社グループの持続的な企業価値向上、事業戦略、取引関係などを総合的に勘案し、純投資目的以外の目的である投資株式の新規保有や継続保有を判断しております。議決権の行使につきましては、提案されている議案について株主価値の毀損につながるものではないかどうか、当該議案が当該企業及び当社グループの企業価値の増大に資するものであるかどうか等を判断したうえで適切に議決権を行使しております。

なお、当社は現在、純投資目的である投資株式を保有しておらず、今後についても経営理念にある「浮利を追わず」の基本理念のもと、純投資目的である投資株式の保有は原則行わないこととしております。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、純投資目的以外の目的である投資株式について、個別銘柄ごとに安定的かつ継続的な関係強化の必要性、経済合理性等を総合的に勘案した上で、中長期的に当社の企業価値の向上に資すると判断したものを保有しております。また、当社は、個別銘柄ごとに当該銘柄の業績の状況、株価、配当額、配当利回り、取引状況等により検証しており、保有の適否について取締役会で検証を行っております。

なお、株式保有リスクの抑制等の観点から、取締役会での検証等により当該銘柄を保有することによる経済的合理性の意義が必ずしも十分でない判断される銘柄については、保有先企業との十分な対話を経た上で縮減を図ることとしております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	2	0
非上場株式以外の株式	10	122

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式			
非上場株式以外の株式	4	4	それぞれ取引先持株会に加入しているものであり、定期的な買付けによるものであります。

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式		
非上場株式以外の株式	1	5

c . 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の保有の有無 (注2)
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
森永製菓(株)	15,897	15,458	当社の重要販売先であり、取引量の維持、拡大を目的として取引先持株会に加入し保有しております。定期的な買付けにより株式数が増加しております。	無
	60	61		
井村屋グループ(株)	11,499	11,149	当社の重要販売先であり、取引量の維持、拡大を目的として取引先持株会に加入し保有しております。定期的な買付けにより株式数が増加しております。	無
	25	28		
(株)ニッポン	10,714	10,150	当社の重要販売先であり、取引量の維持、拡大を目的として取引先持株会に加入し保有しております。定期的な買付けにより株式数が増加しております。	無
	17	16		
(株)ブルボン	2,250	1,725	当社の重要販売先であり、取引量の維持、拡大を目的として取引先持株会に加入し保有しております。定期的な買付けにより株式数が増加しております。	有
	5	3		
(株)ふくおかフィナンシャルグループ	2,000	2,000	当社のメインバンクである(株)福岡銀行の親会社であり、資金需要時に円滑な調達が実現できるよう、関係強化のために保有しております。	無
	4	4		
リックス(株)	2,400	2,400	同じ福岡県に本社を置く企業であり、異業種の業界動向等の情報収集を行うなど、関係強化のために保有しております。	有
	3	3		
(株)グリーンクロス	2,000	2,000	同じ福岡県に本社を置く企業であり、異業種の業界動向等の情報収集を行うなど、関係強化のために保有しております。	有
	1	2		
山崎製パン(株)	1,000	1,000	当社の最重要販売先であり、取引量の維持、拡大を目的として保有しております。	有
	1	1		
(株)マルタイ	200	200	当社の子会社の重要販売先であり、取引量の維持、拡大を目的として保有しております。	無
	0	0		
(株)ホクリヨウ	1,000	1,000	当社の重要仕入先であり、取引量の維持、拡大を目的として、また同業種であることからその動向や取組等の情報収集を目的として保有しております。	有
	0	0		

- (注) 1 定量的な保有効果については記載が困難であるため、定性的な観点から判断した保有効果を記載しております。保有の合理性については、当該銘柄の業績の状況、株価、配当額、配当利回り、取引状況等により毎年6月の取締役会にて検証しております。
- 2 当社の株式の保有の有無については、銘柄が持株会社の場合はその主要な子会社の保有分(実質所有株式数)を勘案し記載しています。

みなし保有株式

該当事項はありません。

保有目的が純投資目的である投資株式
 該当事項はありません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したものの
 該当事項はありません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したものの
 該当事項はありません。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2021年4月1日から2022年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2021年4月1日から2022年3月31日まで)の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツの監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するために、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、同法人主催のディスクロージャーセミナーや、有限責任監査法人トーマツ主催の決算セミナー等へ参加し、会計基準等の内容及び変更等の適切な把握に努めるとともに、その内容について関係者への周知徹底とマニュアル整備を図る等の取組みを行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1 2,966	1 3,199
受取手形及び売掛金	2,223	
受取手形		197
売掛金		2,056
商品及び製品	713	883
仕掛品	49	57
原材料及び貯蔵品	241	395
その他	31	46
貸倒引当金	5	12
流動資産合計	6,221	6,824
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	1, 2 1,786	1, 2 1,689
機械装置及び運搬具（純額）	1, 2 916	1, 2 1,061
土地	1 1,915	1 1,915
その他（純額）	1, 2 43	1, 2 37
有形固定資産合計	4,662	4,704
無形固定資産		
投資その他の資産	5	8
投資有価証券	130	123
繰延税金資産		86
その他	23	15
貸倒引当金	4	4
投資その他の資産合計	150	221
固定資産合計	4,817	4,934
資産合計	11,038	11,759
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	1 672	1 667
短期借入金	1 1,002	1 1,002
未払法人税等	270	251
未払消費税等	20	
賞与引当金	74	79
その他	515	862
流動負債合計	2,556	2,863
固定負債		
長期借入金	1 1,158	1 775
長期未払金	562	562
繰延税金負債	11	
その他	26	28
固定負債合計	1,758	1,367
負債合計	4,315	4,230
純資産の部		
株主資本		
資本金	455	455
資本剰余金	372	382
利益剰余金	5,954	6,737
自己株式	107	86
株主資本合計	6,675	7,489
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	47	40
その他の包括利益累計額合計	47	40
純資産合計	6,723	7,529
負債純資産合計	11,038	11,759

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年 4月 1日 至 2021年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)
売上高	13,825	17,430
売上原価	2 10,592	2 14,026
売上総利益	3,233	3,403
販売費及び一般管理費		
運賃	824	908
保管費	230	199
役員報酬	142	146
給料及び手当	250	234
貸倒引当金繰入額	4	7
賞与引当金繰入額	30	30
その他	566	551
販売費及び一般管理費合計	2 2,048	2 2,077
営業利益	1,184	1,325
営業外収益		
受取利息	0	0
受取配当金	2	2
受取賃貸料	24	24
助成金収入	2	4
その他	5	8
営業外収益合計	35	40
営業外費用		
支払利息	9	8
営業外費用合計	9	8
経常利益	1,210	1,357
特別利益		
投資有価証券売却益		5
受取保険金	4 12	
その他	9	
特別利益合計	21	5
特別損失		
固定資産除売却損	3 2	3 0
投資有価証券評価損	5 19	5 1
減損損失		6 22
特別損失合計	21	24
税金等調整前当期純利益	1,210	1,337
法人税、住民税及び事業税	401	437
法人税等調整額	21	95
法人税等合計	380	341
当期純利益	830	996
非支配株主に帰属する当期純利益		
親会社株主に帰属する当期純利益	830	996

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年 4月 1日 至 2021年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月31日)
当期純利益	830	996
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	1	7
その他の包括利益合計	1	7
包括利益	832	988
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	832	988
非支配株主に係る包括利益		

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本					その他の包括利益累計額		純資産合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	その他の 包括利益 累計額合計	
当期首残高	455	366	5,295	131	5,986	46	46	6,032
当期変動額								
剰余金の配当			171		171			171
親会社株主に帰属する 当期純利益			830		830			830
自己株式の取得				0	0			0
自己株式の処分		6		24	30			30
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）						1	1	1
当期変動額合計		6	658	24	689	1	1	691
当期末残高	455	372	5,954	107	6,675	47	47	6,723

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本					その他の包括利益累計額		純資産合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	その他の 包括利益 累計額合計	
当期首残高	455	372	5,954	107	6,675	47	47	6,723
当期変動額								
剰余金の配当			213		213			213
親会社株主に帰属する 当期純利益			996		996			996
自己株式の取得				0	0			0
自己株式の処分		9		21	30			30
株主資本以外の項目 の当期変動額（純額）						7	7	7
当期変動額合計		9	783	21	813	7	7	805
当期末残高	455	382	6,737	86	7,489	40	40	7,529

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2020年 4月 1日 至 2021年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	1,210	1,337
減価償却費	385	374
減損損失		22
貸倒引当金の増減額(は減少)	3	7
賞与引当金の増減額(は減少)	4	4
受取利息及び受取配当金	2	2
支払利息	9	8
受取保険金	12	
固定資産除売却損益(は益)	2	0
投資有価証券売却損益(は益)		5
投資有価証券評価損益(は益)	19	1
売上債権の増減額(は増加)	254	30
棚卸資産の増減額(は増加)	7	330
仕入債務の増減額(は減少)	53	5
未払消費税等の増減額(は減少)	1	20
その他	18	36
小計	1,392	1,397
利息及び配当金の受取額	2	2
利息の支払額	9	8
収用補償金の受取額		205
保険金の受取額	12	
災害損失の支払額	8	
法人税等の支払額	335	456
営業活動によるキャッシュ・フロー	1,053	1,140
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	637	637
定期預金の払戻による収入	637	637
有形固定資産の取得による支出	236	307
無形固定資産の取得による支出		4
投資有価証券の取得による支出	4	4
投資有価証券の売却による収入		5
その他	1	0
投資活動によるキャッシュ・フロー	239	311
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額(は減少)	95	22
長期借入れによる収入	200	
長期借入金の返済による支出	435	404
自己株式の取得による支出	0	0
自己株式の売却による収入	0	
配当金の支払額	171	213
財務活動によるキャッシュ・フロー	311	596
現金及び現金同等物に係る換算差額		
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	501	232
現金及び現金同等物の期首残高	1,927	2,429
現金及び現金同等物の期末残高	2,429	2,661

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

- 1 連結の範囲に関する事項
連結子会社の数 1社
連結子会社の名称
日本化工食品株式会社
非連結子会社はありません。
- 2 持分法の適用に関する事項
該当事項はありません。
- 3 連結子会社の事業年度等に関する事項
連結子会社の決算日と連結決算日は一致しております。
- 4 会計方針に関する事項
 - (1) 重要な資産の評価基準及び評価方法
有価証券
その他有価証券
市場価格のない株式等以外のもの
時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)
市場価格のない株式等
移動平均法による原価法
棚卸資産
評価基準は原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)によっております。
商品、製品、仕掛品、原材料
移動平均法
貯蔵品
最終仕入原価法
 - (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法
有形固定資産(リース資産を除く)
定率法
ただし、1998年4月1日以降取得した建物(建物附属設備は除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。
なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。
建物及び構築物 7～31年
機械装置及び運搬具 2～10年
無形固定資産(リース資産を除く)
定額法
ただし、ソフトウェア(自社利用分)については、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法を採用しております。
 - (3) 重要な引当金の計上基準
貸倒引当金
債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等の特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。
賞与引当金
従業員の賞与支給に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

(4) 重要な収益及び費用の計上基準

当社グループは、主に液卵、冷凍卵、卵加工品、調味料を製造し、食品メーカー等へ販売しており、顧客との販売契約に基づいて商品または製品を引渡す履行義務を負っております。これら商品または製品の販売については、顧客に引渡した時点において顧客が当該商品または製品に対する支配を獲得して履行義務が充足されると判断しており、当該商品または製品の引渡し時点で収益を認識しております。

ただし、国内での販売については、出荷時から顧客が当該商品または製品に対する支配を獲得するまでの期間が通常の期間であるため、出荷時に収益を認識しております。

収益は、顧客との契約において約束された対価から、値引き、リベート等を控除した金額で認識しております。また、当社グループが代理人として商品または製品の販売に関与している場合には、純額で収益を認識しております。

(5) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(6) その他連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項

従業員の退職金制度について

資格等級に応じて一定金額を月額給与に上乗せして支給する前払退職金制度を採用しております。

資産に係る控除対象外消費税等の会計処理

資産に係る控除対象外消費税及び地方消費税は当連結会計年度の費用として処理しております。

(重要な会計上の見積り)

(固定資産の減損)

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

(百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
有形固定資産	4,662	4,704
減損損失		22

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社グループは事業形態の違いにより、大きくは鶏卵関連事業、調味料関連事業にグルーピングし、鶏卵関連事業は原則として事業部別にグルーピングしております。また、将来の使用が見込まれていない遊休資産については、個々の物件単位で資産のグルーピングを行っております。

当社グループは、固定資産のうち減損の兆候がある資産又は資産グループについて、当該資産又は資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローの総額が帳簿価額を下回る場合には、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として計上しております。減損の兆候の把握、減損損失の認識及び測定に当たっては慎重に検討しておりますが、事業計画や市場環境の変化により、その見積り額の前提とした条件や仮定に変更が生じ減少した場合、翌連結会計年度において減損処理が必要となる可能性があります。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、約束した財またはサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財またはサービスと交換に受け取る見込まれる金額で収益を認識することとしております。これにより、従来、顧客に支払われる対価の一部を販売促進費として販売費及び一般管理費に計上していましたが、これら顧客に支払われる対価は売上高から控除して表示する方法に変更しております。

この他、顧客から受け取る対価の総額を売上高として認識していた取引のうち顧客への商品等の提供における当社グループの役割が代理人に該当する取引については、顧客から受け取る対価から商品等の仕入先に支払う額を控除した純額で売上高を認識する方法に変更しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当連結会計年度の期首より前までに新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当連結会計年度の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。ただし、収益認識会計基準第86項に定める方法を適用し、当連結会計年度の期首より前までに従前の取扱いに従って収益の額を認識した契約に、新たな会計方針を遡及適用しておりません。

また、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」に表示していた「受取手形及び売掛金」は、当連結会計年度より「受取手形」、「売掛金」に含めて表示しております。ただし、収益認識会計基準第89 - 2項に定める経過的な取扱いに従って、前連結会計年度について新たな表示方法により組替えを行っておりません。

この結果、収益認識会計基準等の適用を行う前と比べて、当連結会計年度の売上高が105百万円、売上原価70百万円それぞれ減少した結果、売上総利益が34百万円減少しておりますが、販売費及び一般管理費についても34百万円減少したことで、営業利益、経常利益及び税金等調整前当期純利益に与える影響はありません。また、利益剰余金の当連結会計年度の期首残高及び1株当たり情報への影響もありません。

なお、収益認識会計基準第89 - 3項に定める経過的な取扱いに従って、前連結会計年度に係る「収益認識関係」注記については記載しておりません。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44 - 2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしております。なお、連結財務諸表に与える影響はありません。

また、「金融商品関係」注記において、金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項等の注記を行うこととしました。ただし、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 2019年7月4日)第7 - 4項に定める経過的な取扱いに従って、当該注記のうち前連結会計年度に係るものについては記載しておりません。

(表示方法の変更)

(連結損益計算書関係)

前連結会計年度において、「営業外収益」の「その他」に含めていた「助成金収入」は、営業外収益の総額の100分の10を超えたため、当連結会計年度より独立掲記することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外収益」の「その他」に表示していた8百万円は、「助成金収入」2百万円、「その他」5百万円として組み替えております。

(追加情報)

当期の連結財務諸表の作成にあたって、2022年度上期以降も一定期間にわたり新型コロナウイルス感染症の影響が継続するものとの仮定を置いたうえで会計上の見積りを検討しておりますが、現時点において重要な影響を与えるものではないと判断しております。ただし、今後の状況の変化によって判断を見直した結果、翌連結会計年度以降の連結財務諸表において重要な影響を与える可能性があります。

(連結貸借対照表関係)

1 担保に供している資産及び対応する債務は、次のとおりであります。

(1) 担保に供している資産

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
定期預金	7百万円	7百万円
建物及び構築物	702	655
機械装置及び運搬具	1	1
土地	1,456	1,456
その他(工具、器具及び備品)	0	0
計	2,167	2,120

(2) 対応する債務

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
支払手形及び買掛金	24百万円	31百万円
短期借入金	486	595
長期借入金 (1年内返済予定額を含む)	1,316	1,011
計	1,827	1,638

2 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
	7,147百万円	7,425百万円

(連結損益計算書関係)

1 顧客との契約から生じる収益

売上高については、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分して記載しておりません。顧客との契約から生じる収益の金額は、連結財務諸表「注記事項(収益認識関係) 1. 顧客との契約から生じる収益を分解した情報」に記載しております。

2 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
	147百万円	143百万円

3 固定資産除売却損の内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
固定資産除却損		
建物及び構築物	0百万円	0百万円
機械装置及び運搬具	2	0
その他(工具、器具及び備品)	0	0
計	2	0

4 災害による損失及び受取保険金

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

2019年9月に発生した台風15号及び台風17号により当社の連結子会社である「日本化工食品株式会社」が被害を受けた損失に対して受領した損害保険金を「受取保険金」として計上しております。

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

該当事項はありません。

5 投資有価証券評価損

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

当社が保有する「その他有価証券」に区分される有価証券のうち、実質価額が著しく下落したものについて、減損処理を実施したものであります。

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

当社が保有する「その他有価証券」に区分される有価証券のうち、実質価額が著しく下落したものについて、減損処理を実施したものであります。

6 減損損失

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

用途	種類	場所	金額(百万円)
事業用資産	建物及び構築物	京都府綴喜郡井手町	1
事業用資産	機械装置及び運搬具	京都府綴喜郡井手町	21
合計			22

当社グループは事業形態の違いにより、大きくは鶏卵関連事業、調味料関連事業にグルーピングし、鶏卵関連事業は原則として事業部別にグルーピングしております。また、将来の使用が見込まれていない遊休資産については、個々の物件単位で資産のグルーピングを行っております。

当連結会計年度において、上記資産については、当初想定していた収益が獲得できておらず、減損の兆候が認められたため、将来の回収可能性を検討した結果、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。なお、回収可能価額は使用価値により測定しておりますが、将来キャッシュ・フローが見込めないことにより、回収可能価額を零と評価しております。

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
その他の有価証券評価差額金		
当期発生額	2百万円	5百万円
組替調整額		5
税効果調整前	2	10
税効果額	0	2
その他の有価証券評価差額金	1	7
その他の包括利益合計	1	7

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

1 発行済株式及び自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
発行済株式				
普通株式(株)	8,345,370			8,345,370
自己株式				
普通株式(株)	203,991	670	38,050	166,611

(注) 1 自己株式の増加は、単元未満株式の買取670株によるものであります。

2 自己株式の減少は、取締役に対する譲渡制限付株式報酬としての自己株式の処分38,000株、単元未満株式の売渡50株によるものであります。

2 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

3 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2020年6月25日 定時株主総会	普通株式	89	11	2020年3月31日	2020年6月26日
2020年11月10日 取締役会	普通株式	81	10	2020年9月30日	2020年12月10日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2021年6月25日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	114	14	2021年3月31日	2021年6月28日

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

1 発行済株式及び自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
発行済株式				
普通株式(株)	8,345,370			8,345,370
自己株式				
普通株式(株)	166,611	195	33,200	133,606

(注) 1 自己株式の増加は、単元未満株式の買取195株によるものであります。

2 自己株式の減少は、取締役に対する譲渡制限付株式報酬としての自己株式の処分33,200株によるものであります。

2 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

3 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2021年6月25日 定時株主総会	普通株式	114	14	2021年3月31日	2021年6月28日
2021年11月11日 取締役会	普通株式	98	12	2021年9月30日	2021年12月10日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年6月28日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	131	16	2022年3月31日	2022年6月29日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
現金及び預金	2,966百万円	3,199百万円
預入期間が3ヶ月を超える 定期預金	537	537
現金及び現金同等物	2,429	2,661

(リース取引関係)

オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
1年内	1百万円	3百万円
1年超	2	8
計	3	12

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1)金融商品に対する取組方針

当社グループは、経営理念の中にある「浮利を追わず」の精神のもと、リスクのある取引は行わないこととしており、資金運用については短期的な預金等に限定し、銀行等金融機関からの借入により資金を調達しております。

(2)金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。また、投資有価証券は、主に取引先企業との関係強化に関連する株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、1年以内の支払期日であります。短期借入金は、主に運転資金であり、長期借入金は、主に設備投資に必要な資金調達をしたものであります。長期未払金は、役員退職慰労金の打切り支給に係る債務であり、当該役員の退職時に支給する予定であります。

(3)金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社は、受取手形及び売掛金に係る顧客の信用リスクについて、与信限度管理規程に基づいて各営業担当者が主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減に努め、リスク低減を図っております。また、連結子会社についても当社の規程に準じて、同様の管理を行っております。

市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

当社の保有する投資有価証券は主として株式であり、株式については定期的に時価や発行先企業の財務状況等を把握しております。また、借入金の金利については、定期的に市場金利の状況を把握しております。

資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）の管理

当社は、営業債権の入金と営業債務の支払状況から経理担当者が適時に資金繰り予定表を作成し、当座貸越枠の活用と手元流動性預金で流動性リスクを管理しております。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

前連結会計年度(2021年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	時 価	差 額
(1)投資有価証券	128	128	
資産計	128	128	
(2)長期借入金(1年内返済予定額含む)	1,563	1,564	1
負債計	1,563	1,564	1

(*1)「現金及び預金」、「受取手形及び売掛金」、「支払手形及び買掛金」、「短期借入金」、「未払法人税等」は、現金であること、及び短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、注記を省略しております。

(*2)時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額

区分	連結会計年度(百万円)
非上場株式 1	2
長期未払金 2	562

1 非上場株式は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(1)投資有価証券」には含めておりません。

2 長期未払金は、役員退職慰労金の打切り支給に係る債務であり、当該役員の退職時期が特定されておらず、時価を把握することが極めて困難と考えられるため、記載しておりません。

当連結会計年度(2022年3月31日)

(単位:百万円)

	連結貸借対照表計上額	時 価	差 額
(1)投資有価証券	122	122	
資産計	122	122	
(2)長期借入金(1年内返済予定額含む)	1,158	1,157	0
(3)長期未払金	562	563	0
負債計	1,721	1,720	0

(*1)「現金及び預金」、「受取手形」、「売掛金」、「支払手形及び買掛金」、「短期借入金」、「未払法人税等」は、現金であること、及び短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、注記を省略しております。

(*2)市場価格のない株式等は「(1)投資有価証券」には含まれておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

区分	連結会計年度(百万円)
非上場株式	0

(注1)金銭債権及び満期がある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2021年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超5年以内	5年超10年以内	10年超
現金及び預金	2,966			
受取手形及び売掛金	2,223			
合計	5,190			

当連結会計年度(2022年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超5年以内	5年超10年以内	10年超
現金及び預金	3,199			
受取手形	197			
売掛金	2,056			
合計	5,453			

(注2)社債、長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度(2021年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
短期借入金	598					
長期借入金	404	382	300	319	119	37

当連結会計年度(2022年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
短期借入金	620					
長期借入金	382	300	319	119	37	

3 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：同一の資産または負債の活発な市場における（無調整の）相場価格により算定した時価

レベル2の時価：レベル1のインプット以外の直接または間接的に観察可能なインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：重要な観察できないインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1)時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

当連結会計年度（2022年3月31日）

区分	時価（百万円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券 その他有価証券 株式	122			122
資産計	122			122

(2)時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

当連結会計年度（2022年3月31日）

区分	時価（百万円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
長期借入金		1,157		1,157
長期未払金		563		563
負債計		1,720		1,720

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

上場株式は相場価格を用いて評価しております。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類しております。

長期借入金

元金の合計額と、当該債務の残存期間及び信用リスクを加味した利率を基に、割引現在価値法により算定しており、レベル2の時価に分類しております。

長期未払金

個人の退任時期を見積り、当該退任時期に基づく無リスク利率を基に、割引現在価値法により算定しており、レベル2の時価に分類しております。

(有価証券関係)

1 その他有価証券

前連結会計年度(2021年3月31日)

	区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額 が取得原価を 超えるもの	(1) 株式	124	55	69
	(2) 債券			
	(3) その他			
	小計	124	55	69
連結貸借対照表計上額 が取得原価を 超えないもの	(1) 株式	4	5	1
	(2) 債券			
	(3) その他			
	小計	4	5	1
合計		128	60	67

当連結会計年度(2022年3月31日)

	区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額 が取得原価を 超えるもの	(1) 株式	118	59	58
	(2) 債券			
	(3) その他			
	小計	118	59	58
連結貸借対照表計上額 が取得原価を 超えないもの	(1) 株式	4	5	0
	(2) 債券			
	(3) その他			
	小計	4	5	0
合計		122	65	57

2 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

区分	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	5	5	
債券			
その他			
合計	5	5	

3 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度において、有価証券について19百万円(その他有価証券の時価のない株式19百万円)減損処理を行っております。

当連結会計年度において、有価証券について1百万円(その他有価証券の時価のない株式1百万円)減損処理を行っております。

なお、減損処理に当たっては、時価のある有価証券については期末における時価が取得原価に比べ50%以上下落した場合には全て減損処理を行い、30~50%程度下落した場合には、回収可能性等を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っております。また、時価のない有価証券については期末の実質価額が取得原価に比べて50%以上下落した場合に回復可能性がある場合を除き減損処理を行っております。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社グループの従業員の退職金制度については、資格等級に応じて一定金額を月額給与に上乗せして支給する前払退職金制度を採用しております。

2 前払退職金計上額

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

前払退職金制度による従業員に対する前払退職金22百万円を支払っております。

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

前払退職金制度による従業員に対する前払退職金22百万円を支払っております。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
(繰延税金資産)		
長期末払金	171百万円	171百万円
減損損失	141	148
賞与引当金	23	24
その他	55	63
小計	391	408
評価性引当額	320	247
合計	71	160
(繰延税金負債)		
固定資産圧縮積立金	63百万円	56百万円
その他有価証券評価差額金	19	17
合計	82	74
繰延税金資産の純額		86
繰延税金負債の純額	11	

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別内訳

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
法定実効税率	30.6%	30.7%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.2	0.2
評価性引当額の増減額	0.5	5.4
修正申告による影響額	0.2	
前期確定申告差異	0.1	0.1
その他	0.0	0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	31.4	25.5

(企業結合等関係)

該当事項はありません。

(資産除去債務関係)

該当事項はありません。

(賃貸等不動産関係)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(収益認識関係)

1 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

(財またはサービスの種類別の情報)

当連結会計年度（自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他 (注)	合計
	鶏卵関連事業	調味料関連事業	計		
液卵	12,436		12,436		12,436
凍結卵	2,782		2,782		2,782
卵加工品	509		509		509
その他鶏卵関連	591		591		591
調味料		1,085	1,085		1,085
その他				24	24
顧客との契約から生じる収益	16,319	1,085	17,405	24	17,430
その他の収益					
外部顧客への売上高	16,319	1,085	17,405	24	17,430

(注)「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、太陽光発電事業であります。

(財またはサービスの移転の時期別の情報)

当連結会計年度（自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他	合計
	鶏卵関連事業	調味料関連事業	計		
一時点で移転される財 一定の期間にわたり移転される財	16,319	1,085	17,405	24	17,430
外部顧客への売上高	16,319	1,085	17,405	24	17,430

(注)「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、太陽光発電事業であります。

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

鶏卵関連事業及び調味料関連事業の取引の対価は、商品または製品の引渡し後、概ね2ヶ月以内に受領しており、当該顧客との契約に基づく債権について、重要な金融要素の調整は行っておりません。

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報のその他の情報につきましては、「(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)」の「4 会計方針に関する事項」「(4)重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおりであります。

3. 顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係並びに当連結会計年度末において存在する顧客との契約から翌連結会計年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

(1) 契約資産及び契約負債の残高等

(単位：百万円)

	当連結会計年度
顧客との契約から生じた債権（期首残高）	2,223
顧客との契約から生じた債権（期末残高）	2,254
契約資産（期首残高）	
契約資産（期末残高）	
契約負債（期首残高）	
契約負債（期末残高）	

期首において契約負債残高がなく、当期に収益認識した金額はありません。

顧客との契約から生じた債権は、履行義務を果たした後、所定の請求日に基づいて請求を実施し、概ね2ヶ月以内に対価を受領しております。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

該当事項はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、「鶏卵関連事業」と「調味料関連事業」の2つの事業を柱として事業活動を展開しており、「鶏卵関連事業」と「調味料関連事業」の2つを報告セグメントとしております。

「鶏卵関連事業」は、業務用液卵及び卵加工品等の製造販売をしております。「調味料関連事業」は、業務用粉体調味料及び顆粒調味料等の製造販売をしております。

また、「その他」については、太陽光発電事業であります。

2 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

セグメント間の売上高は、第三者間取引価格に基づいております。

「会計方針の変更」に記載のとおり、当連結会計年度の期首から収益認識会計基準等を適用し、収益認識に関する会計処理方法を変更したため、事業セグメントの利益又は損失の算定方法を同様に変更しております。

当該変更により、従来の方法に比べて、当連結会計年度の「鶏卵関連事業」の売上高は34百万円減少し、「調味料関連事業」の売上高は70百万円減少しております。なお、セグメント利益に与える影響はありません。

3 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他 (注)	合計
	鶏卵関連事業	調味料関連事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	12,696	1,104	13,801	24	13,825
セグメント間の内部 売上高又は振替高		48	48		48
計	12,696	1,152	13,849	24	13,873
セグメント利益	1,140	30	1,170	14	1,184
セグメント資産	10,093	1,001	11,094	190	11,285
セグメント負債	4,043	255	4,299	23	4,322
その他の項目					
減価償却費	345	30	376	9	385
特別利益		21	21		21
(受取保険金)		12	12		12
(その他)		9	9		9
特別損失	21	0	21		21
(固定資産除売却損)	2	0	2		2
(投資有価証券評価損)	19		19		19
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	182	34	217		217

(注)「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、太陽光発電事業であります。

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他 (注)	合計
	鶏卵関連事業	調味料関連事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	16,319	1,085	17,405	24	17,430
セグメント間の内部 売上高又は振替高		110	110		110
計	16,319	1,196	17,516	24	17,540
セグメント利益	1,242	70	1,312	13	1,325
セグメント資産	10,768	1,062	11,830	182	12,013
セグメント負債	3,946	288	4,234	9	4,244
その他の項目					
減価償却費	334	31	366	8	374
特別利益	5		5		5
(投資有価証券売却益)	5		5		5
特別損失	24	0	24		24
(固定資産除売却損)	0	0	0		0
(投資有価証券評価損)	1		1		1
(減損損失)	22		22		22
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	432	9	442	0	442

(注)「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、太陽光発電事業であります。

4 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の主な内容(差異調整に関する事項)

(単位:百万円)

売上高	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	13,849	17,516
「その他」の区分の売上高	24	24
セグメント間取引消去	48	110
連結財務諸表の売上高	13,825	17,430

(単位:百万円)

利益	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	1,170	1,312
「その他」の区分の利益	14	13
連結財務諸表の営業利益	1,184	1,325

(単位:百万円)

資産	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	11,094	11,830
「その他」の区分の資産	190	182
セグメント間取引消去	246	254
連結財務諸表の資産合計	11,038	11,759

(単位：百万円)

負債	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	4,299	4,234
「その他」の区分の負債	23	9
セグメント間取引消去	6	14
連結財務諸表の負債合計	4,315	4,230

(単位：百万円)

その他の項目	報告セグメント計		その他		調整額		連結財務諸表計上額	
	前連結会計年度	当連結会計年度	前連結会計年度	当連結会計年度	前連結会計年度	当連結会計年度	前連結会計年度	当連結会計年度
減価償却費	376	366	9	8			385	374
特別利益 (投資有価証券売却益)	21	5					21	5
(受取保険金)	12	5					12	5
(その他)	9						9	
特別損失 (固定資産除売却損)	21	24					21	24
(投資有価証券評価損)	2	0					2	0
(減損損失)	19	1					19	1
		22						22
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	217	442		0			217	442

【関連情報】

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報の中で同様の情報が開示されているため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報の中で同様の情報が開示されているため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)
 該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
 セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
1株当たり純資産額	822円03銭	916円86銭
1株当たり当期純利益	101円63銭	121円46銭

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
 2 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	830	996
普通株主に帰属しない金額(百万円)		
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益(百万円)	830	996
普通株式の期中平均株式数(株)	8,167,411	8,201,797

3 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2021年3月31日)	当連結会計年度 (2022年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	6,723	7,529
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	6,723	7,529
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数(株)	8,178,759	8,211,764

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期末残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	598	620	0.466	
1年以内に返済予定の長期借入金	404	382	0.387	
1年以内に返済予定のリース債務				
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	1,158	775	0.352	2023年9月30日～ 2026年7月31日
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)				
其他有利子負債				
合計	2,161	1,778		

- (注) 1 「平均利率」については、借入金の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。
 2 長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	300	319	119	37

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	4,652	9,020	13,676	17,430
税金等調整前 四半期(当期)純利益 (百万円)	393	672	1,119	1,337
親会社株主に帰属する 四半期(当期)純利益 (百万円)	271	534	846	996
1株当たり 四半期(当期)純利益 (円)	33.20	65.22	103.19	121.46

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり 四半期純利益 (円)	33.20	32.02	37.97	18.27

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	2 2,740	2 2,997
受取手形	95	108
売掛金	1,850	1,884
商品及び製品	629	805
仕掛品	22	21
原材料及び貯蔵品	194	234
前払費用	25	30
その他	2	13
貸倒引当金	3	10
流動資産合計	5,557	6,086
固定資産		
有形固定資産		
建物	4,330	4,337
減価償却累計額	2,685	2,782
建物(純額)	2 1,645	2 1,555
機械及び装置	3,856	4,207
減価償却累計額	3,003	3,195
機械及び装置(純額)	2 853	2 1,011
車両運搬具	60	62
減価償却累計額	57	60
車両運搬具(純額)	2	1
工具、器具及び備品	219	219
減価償却累計額	187	190
工具、器具及び備品(純額)	2 32	2 29
土地	2 1,798	2 1,798
有形固定資産合計	4,332	4,396
無形固定資産		
ソフトウェア	1	4
電話加入権	3	3
無形固定資産合計	4	8
投資その他の資産		
投資有価証券	130	123
関係会社株式	240	240
出資金	0	0
差入保証金	5	5
長期前払費用	8	0
繰延税金資産		86
その他	5	5
貸倒引当金	4	4
投資その他の資産合計	386	457
固定資産合計	4,723	4,862
資産合計	10,280	10,948

(単位：百万円)

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	1, 2 485	1, 2 453
短期借入金	2 1,002	2 1,001
未払金	4	142
未払法人税等	265	234
未払消費税等	16	
未払費用	456	473
預り金	13	14
賞与引当金	63	61
その他	2	207
流動負債合計	2,308	2,588
固定負債		
長期借入金	2 1,157	2 775
長期未払金	562	562
繰延税金負債	8	
その他	26	28
固定負債合計	1,755	1,367
負債合計	4,064	3,955
純資産の部		
株主資本		
資本金	455	455
資本剰余金		
資本準備金	366	366
その他資本剰余金	6	15
資本剰余金合計	372	382
利益剰余金		
利益準備金	40	40
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金	135	120
別途積立金	3,800	4,300
繰越利益剰余金	1,472	1,740
利益剰余金合計	5,447	6,201
自己株式	107	86
株主資本合計	6,168	6,952
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	47	40
評価・換算差額等合計	47	40
純資産合計	6,216	6,992
負債純資産合計	10,280	10,948

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2020年 4月 1日 至 2021年 3月 31日)	当事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)
売上高		
商品及び製品売上高	12,720	16,343
売上高合計	12,720	16,343
売上原価		
商品及び製品期首棚卸高	641	629
当期商品仕入高	572	768
当期製品製造原価	9,062	12,530
合計	10,276	13,928
商品及び製品期末棚卸高	629	805
売上原価合計	9,647	13,123
売上総利益	3,073	3,219
販売費及び一般管理費		
運賃	790	871
保管費	230	199
役員報酬	132	130
給料及び手当	207	210
貸倒引当金繰入額	4	7
賞与引当金繰入額	28	27
減価償却費	30	30
その他	495	485
販売費及び一般管理費合計	1,918	1,963
営業利益	1,154	1,256
営業外収益		
受取利息	0	0
受取配当金	1 2	1 9
業務受託料	1 18	1 18
受取賃貸料	24	24
助成金収入	2	4
その他	5	7
営業外収益合計	52	63
営業外費用		
支払利息	9	8
営業外費用合計	9	8
経常利益	1,197	1,311
特別利益		
投資有価証券売却益		5
特別利益合計		5
特別損失		
固定資産除売却損	2 2	2 0
投資有価証券評価損	3 19	3 1
減損損失		4 22
特別損失合計	21	24
税引前当期純利益	1,175	1,291
法人税、住民税及び事業税	397	417
法人税等調整額	28	92
法人税等合計	368	325
当期純利益	806	966

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本										
	資本金	資本剰余金			利益準備金	利益剰余金			自己株式	株主資本合計	
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計		その他利益剰余金					利益剰余金合計
						固定資産圧縮積立金	別途積立金	繰越利益剰余金			
当期首残高	455	366	0	366	40	150	3,500	1,121	4,812	131	5,502
当期変動額											
固定資産圧縮積立金の取崩						15		15			
別途積立金の積立							300	300			
剰余金の配当								171	171		171
当期純利益								806	806		806
自己株式の取得										0	0
自己株式の処分			6	6						24	30
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)											
当期変動額合計			6	6		15	300	350	635	24	665
当期末残高	455	366	6	372	40	135	3,800	1,472	5,447	107	6,168

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	46	46	5,548
当期変動額			
固定資産圧縮積立金の取崩			
別途積立金の積立			
剰余金の配当			171
当期純利益			806
自己株式の取得			0
自己株式の処分			30
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	1	1	1
当期変動額合計	1	1	667
当期末残高	47	47	6,216

当事業年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本										
	資本金	資本剰余金			利益剰余金					自己株式	株主資本 合計
		資本 準備金	その他 資本 剰余金	資本 剰余金 合計	利益 準備金	その他利益剰余金			利益 剰余金 合計		
						固定資産 圧縮 積立金	別途 積立金	繰越利益 剰余金			
当期首残高	455	366	6	372	40	135	3,800	1,472	5,447	107	6,168
当期変動額											
固定資産圧縮積立金の 取崩						14		14			
別途積立金の積立							500	500			
剰余金の配当								213	213		213
当期純利益								966	966		966
自己株式の取得										0	0
自己株式の処分			9	9						21	30
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）											
当期変動額合計			9	9		14	500	267	753	21	784
当期末残高	455	366	15	382	40	120	4,300	1,740	6,201	86	6,952

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	47	47	6,216
当期変動額			
固定資産圧縮積立金の 取崩			
別途積立金の積立			
剰余金の配当			213
当期純利益			966
自己株式の取得			0
自己株式の処分			30
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	7	7	7
当期変動額合計	7	7	776
当期末残高	40	40	6,992

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式

移動平均法による原価法

(2) その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

2 棚卸資産の評価基準及び評価方法

評価基準は原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法)によっております。

(1) 商品、製品、仕掛品、原材料

移動平均法

(2) 貯蔵品

最終仕入原価法

3 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法

ただし、1998年4月1日以降取得した建物(建物附属設備は除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物 7～31年

機械及び装置 2～10年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法

ただし、ソフトウェア(自社利用分)については、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法を採用しております。

4 収益及び費用の計上基準

当社は、主に液卵、冷凍卵、卵加工品を製造、販売しており、顧客との販売契約に基づいて商品または製品を引渡す履行義務を負っております。これら商品または製品の販売については、顧客に引渡した時点において顧客が当該商品または製品に対する支配を獲得して履行義務が充足されると判断しており、当該商品または製品の引渡し時点で収益を認識しております。

ただし、国内での販売については、出荷時から顧客が当該商品または製品に対する支配を獲得するまでの期間が通常の間であるため、出荷時に収益を認識しております。

取引の対価は、商品または製品の引渡し後、概ね2ヶ月以内に受領しており、当該顧客との契約に基づく債権については、重要な金融要素の調整は行っておりません。

収益は、顧客との契約において約束された対価から、値引き、リベート等を控除した金額で認識しております。

また、当社が代理人として仕入及び販売に関与している場合には、純額で収益を認識しております。

5 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等の特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与支給に充てるため、支給見込額に基づき計上しております。

6 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 従業員の退職金制度について

資格等級に応じて一定金額を月額給与に上乗せして支給する前払退職金制度を採用しております。

(2) 資産に係る控除対象外消費税等の会計処理

資産に係る控除対象外消費税及び地方消費税は当事業年度の費用として処理しております。

(重要な会計上の見積り)

(固定資産の減損)

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(百万円)

	前事業年度	当事業年度
有形固定資産	4,332	4,396
減損損失		22

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

(1)の金額の算出方法は、連結財務諸表「注記事項(重要な会計上の見積り)」に記載している内容と同一であるため、記載を省略しております。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、約束した財またはサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財またはサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することとしております。これにより、従来、顧客に支払われる対価の一部を販売促進費として販売費及び一般管理費に計上しておりましたが、これら顧客に支払われる対価は売上高から控除して表示する方法に変更しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当事業年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当事業年度の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。ただし、収益認識会計基準第86項に定める方法を適用し、当事業年度の期首より前までに従前の取扱いに従って収益の額を認識した契約に、新たな会計方針を遡及適用していません。

この結果、収益認識会計基準等の適用を行う前と比べて、当事業年度の売上高が34百万円減少したことで、売上総利益が34百万円減少しておりますが、販売費及び一般管理費についても34百万円減少したことで営業利益、経常利益及び税引前当期純利益に与える影響はありません。また、利益剰余金の当事業年度の期首残高及び1株当たり情報への影響もありません。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することといたしました。なお、財務諸表に与える影響はありません。

(表示方法の変更)

(損益計算書関係)

前事業年度において、「営業外収益」の「その他」に含めていた「助成金収入」は、重要性が増したため、当事業年度より独立掲記することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、「営業外収益」の「その他」に表示していた7百万円は、「助成金収入」2百万円、「その他」5百万円として組み替えております。

(追加情報)

当期の財務諸表の作成にあたって、2022年度上期以降も一定期間にわたり新型コロナウイルス感染症の影響が継続するものとの仮定を置いたうえで会計上の見積りを検討しておりますが、現時点において重要な影響を与えるものではないと判断しております。ただし、今後の状況の変化によって判断を見直した結果、翌事業年度以降の財務諸表において重要な影響を与える可能性があります。

(貸借対照表関係)

1 関係会社に対する資産及び負債は次のとおりであります。

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
買掛金	4百万円	8百万円

2 担保に供している資産及び対応する債務は、次のとおりであります。

(1) 担保に供している資産

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
定期預金	7百万円	7百万円
建物	560	521
機械及び装置	1	1
工具、器具及び備品	0	0
土地	1,339	1,339
計	1,909	1,869

(2) 対応する債務

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
買掛金	24百万円	31百万円
短期借入金	486	595
長期借入金 (1年内返済予定額を含む)	1,315	1,011
計	1,825	1,637

(損益計算書関係)

- 1 このうち、関係会社に対するものは、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
受取配当金	百万円	6百万円
業務受託料	18	18

- 2 固定資産除売却損の内訳は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)	当事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)
固定資産除却損		
建物	百万円	0百万円
機械及び装置	2	0
工具、器具及び備品	0	0
計	2	0

- 3 投資有価証券評価損

前事業年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

当社が保有する「その他有価証券」に区分される有価証券のうち、実質価額が著しく下落したものについて、減損処理を実施したものであります。

当事業年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

当社が保有する「その他有価証券」に区分される有価証券のうち、実質価額が著しく下落したものについて、減損処理を実施したものであります。

- 4 減損損失

前事業年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

用途	種類	場所	金額(百万円)
事業用資産	建物	京都府綴喜郡井手町	1
事業用資産	機械及び装置	京都府綴喜郡井手町	21
合計			22

当社は、原則として事業部別にグルーピングしております。また、将来の使用が見込まれていない遊休資産については、個々の物件単位で資産のグルーピングを行っております。

当事業年度において、上記資産については、当初想定していた収益が獲得できておらず、減損の兆候が認められたため、将来の回収可能性を検討した結果、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。なお、回収可能価額は使用価値により測定しておりますが、将来キャッシュ・フローが見込めないことにより、回収可能価額を零と評価しております。

(有価証券関係)

前事業年度(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日)

子会社株式(貸借対照表計上額は240百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、時価を記載しておりません。

当事業年度(自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)

子会社株式は、市場価格のない株式等のため、子会社株式の時価を記載しておりません。

なお、市場価格のない株式等の子会社株式の貸借対照表計上額は次のとおりです。

区分	当事業年度 (百万円)
子会社株式	240
計	240

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
(繰延税金資産)		
長期未払金	171百万円	171百万円
減損損失	141	148
賞与引当金	19	18
未払事業税	15	12
その他	43	53
小計	390	404
評価性引当額	320	247
合計	70	157
(繰延税金負債)		
固定資産圧縮積立金	59百万円	52百万円
その他有価証券評価差額金	19	17
合計	79	70
繰延税金資産の純額		86
繰延税金負債の純額	8	

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別内訳

	前事業年度 (2021年3月31日)	当事業年度 (2022年3月31日)
法定実効税率	30.5%	30.5%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.2	0.2
評価性引当額の増減額	0.5	5.6
修正申告による影響額	0.3	
前期確定申告差異	0.1	0.1
受取配当金等永久に益金に算入されない項目		0.2
その他	0.0	0.2
税効果会計適用後の法人税等の負担率	31.4	25.2

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、連結財務諸表「注記事項(収益認識関係)」に同一の内容を記載しているため注記を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は償却累 計額(百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末 残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	4,330	27	20 (1)	4,337	2,782	115	1,555
機械及び装置	3,856	386	36 (21)	4,207	3,195	207	1,011
車両運搬具	60	1		62	60	2	1
工具、器具及び備品	219	12	12	219	190	15	29
土地	1,798			1,798			1,798
建設仮勘定							
有形固定資産計	10,266	428	69 (22)	10,625	6,228	341	4,396
無形固定資産							
ソフトウェア	30	4		34	29	1	4
電話加入権	3			3			3
無形固定資産計	33	4		37	29	1	8
長期前払費用	8		7	0			0
繰延資産							
繰延資産計							

(注) 1. 当期増加額のうち、主なものは次のとおりであります。

機械及び装置	関東事業部	アイスビルダー（冷却装置）設置工事	156	百万円
		タンク増設及びライン改造工事	109	百万円
		殺菌機設置工事	42	百万円

2. 当期減少額のうち、主なものは次のとおりであります。

機械及び装置	関西事業部	単層卵殻剥離機装置	21	百万円
--------	-------	-----------	----	-----

なお、当期減少額のうち（ ）内は内書きで減損損失の計上額であります。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	7	10	0	3	14
賞与引当金	63	61	63		61

(注) 貸倒引当金の「当期減少額(その他)」は、回収による取崩及び洗替による戻入額であります。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・ 売渡し	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	
買取・売渡手数料	無料
公告掲載方法	当社の公告は、電子公告により行う。ただし、電子公告によることができない事故その他のやむを得ない事由が生じた時は、日本経済新聞に掲載する方法により行う。当社の公告掲載URLは以下のとおりであります。 https://ifuji.co.jp/
株主に対する特典	株主優待制度 毎年9月30日及び3月31日現在の所有株式数に応じて、それぞれ、「たまごギフト券」(全国たまご商業協同組合発行)を、100株以上1,000株未満の株主様に対し300円分(100円券3枚)、1,000株以上の株主様に対し1,200円分(100円券12枚)贈呈いたします。

- (注) 1. 当社定款の定めにより、当社の株主の有する単元未満株式について、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、同法第166条第1項の規定による請求をする権利、株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利、ならびに株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利以外の権利を行使することができません。
2. 当社は、2022年5月9日の取締役会において、2022年3月末日を基準日とした株主優待をもって、株主優待制度を廃止することを決議いたしました。これにより、2022年3月31日現在の当社株主名簿に記載された100株(1単元)以上保有する株主様に対して、2022年6月に行う株主優待の送付が最終となりました。

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第49期(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日) 2021年6月28日福岡財務支局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

事業年度 第49期(自 2020年4月1日 至 2021年3月31日) 2021年6月28日福岡財務支局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

第50期第1四半期(自 2021年4月1日 至 2021年6月30日) 2021年8月12日福岡財務支局長に提出

第50期第2四半期(自 2021年7月1日 至 2021年9月30日) 2021年11月12日福岡財務支局長に提出

第50期第3四半期(自 2021年10月1日 至 2021年12月31日) 2022年2月10日福岡財務支局長に提出

(4) 臨時報告書

金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第4号の規定に基づく臨時報告書

2021年11月18日福岡財務支局長に提出。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2022年6月28日

イフジ産業株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

福岡事務所

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	寺	田	篤	芳
--------------------	-------	---	---	---	---

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	吉	田	秀	敏
--------------------	-------	---	---	---	---

< 財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているイフジ産業株式会社の2021年4月1日から2022年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、イフジ産業株式会社及び連結子会社の2022年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

外部保管製品の实在性	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社グループでは、「鶏卵関連事業」と「調味料関連事業」の2つの事業を柱として事業を行っている。鶏卵関連事業は、主に会社による液卵の製造販売事業である。</p> <p>液卵の主原料である鶏卵は日々の鶏卵相場に応じて販売価格及び仕入価格が変動するため、会社は夏場の低需要期に原料卵を安く仕入れたり、原料コストの低廉化を図るため比較的安価な加工用原料卵の購入比率を高めるなどして、仕入価格と販売価格の差益を確保しようとしている。</p> <p>会社は、販売の見通し、鶏卵相場や原料の買付状況、また工場の稼働状況等、さまざまな状況を勘案して長期保存が可能な凍結製品を製造・保管しており、その大部分は外部の営業倉庫に保管している。</p> <p>2022年3月31日時点において、会社グループが保有する商品及び製品の残高は883百万円であり、そのうち上記の凍結製品が大部分を占めており、連結貸借対照表における重要な残高となっている。なお、凍結製品在庫残高は、会社規模の拡大と鶏卵相場の変動状況により、近年増加傾向にある。</p> <p>同在庫の現物管理について、会社は主に外部倉庫業者からの入出庫取引報告書とシステム記録の照合及び月次における在庫証明と理論数量の照合を行っている。</p> <p>上記のとおり、凍結製品の製造・保有方針は、会社にとって重要な経営戦略の一つである。他方、同在庫は会社とは物理的に離れた場所に保管されるため、日常的な管理は報告書等を用いた証憑確認が中心とならざるを得ない。そのため、当監査法人は、外部保管製品の实在性を監査上の主要な検討事項に該当するものと判断した。</p>	<p>当監査法人は、外部保管製品の实在性を検討するに当たり、主として以下の監査手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 会社において実施されている外部委託倉庫から入手した在庫証明と会社帳簿との照合状況を確認、外部保管在庫の管理に対する内部統制の整備及び運用評価手続を実施した。 ・ 外部倉庫の在庫保管数量の異常の有無を把握するため、保管数量と保管料の相関関係を利用して分析を実施した。 ・ 期中において、主要外部倉庫への現場視察・棚卸資産の現物確認を実施するとともに、外部倉庫担当者へ在庫の管理状況について質問を実施した。 ・ 期末日において、主要外部保管倉庫の現物確認を実施した。 ・ 主要な外部保管倉庫について、期末日時点における預け在庫の残高確認を実施した。 ・ 棚卸の集計結果が会社帳簿に反映されているか確かめた。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、イフジ産業株式会社の2022年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、イフジ産業株式会社が2022年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- 1 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
 - 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2022年6月28日

イフジ産業株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

福岡事務所

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 寺田篤芳

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 吉田秀敏

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているイフジ産業株式会社の2021年4月1日から2022年3月31日までの第50期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、イフジ産業株式会社の2022年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

外部保管製品の実在性

連結財務諸表の監査報告書に記載されている監査上の主要な検討事項と同一内容であるため、記載を省略している。
--

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- 1 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
 - 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。